

### 第3章 鼎地区の調査結果

#### 第1節 鼎地区の背景

##### 1 鼎地区の歴史沿革と概要

1875（明治8）年に山村、名古屋村、一色村の3村が合併、現在の鼎地区をもって鼎村が誕生した。3村の合併を古来中国に伝わる3脚の器である鼎にちなみ、自治を推進し、発展させていこうとする意図と熱意の元に「鼎（かなえ）」と命名された。鼎地区の歴史沿革は〈図表24〉の通りである。この間、鼎地区も農村地帯から、都市型の宅地商業地域へと変貌してきたが、その過程は平坦なものではなく、都市化に伴うゴミ問題、工場進出による公害問題、中央道開通による道路等交通施設の設備や交通事故対策、飯田市との合併問題などの大きな問題を抱えながら歩んできた。鼎地区では、高度経済成長期と前後して飯田市のベッドタウンという形で住宅や商工業農地としての開発が徐々に進んできた。即ち、中心知も近隣他地区と同様に、高度経済成長時代以降、農地の宅地化や商工業地化が徐々に

に進行していた。1994（平成6）年に国道のバイパス（通称アップルロード）が地区の西部（一色地区、名古屋地区）に開通してからは、周囲の景観が一変するほど開発が進み、かつては果樹園地帯であったところに大型店の出店が相次ぎ、アパートや住宅の建設も急激に進んだ。

鼎地区を飯田市街地の高台から眺めると、足下を西から東に、両側がブロックと石積みの堤防で整然と護られた白い河原、美しい流れの松川が流れ、その南に広がる緑の田園と新旧の農家、商店街、工場、学校、公共施設が建ち並ぶ3段の河岸段丘の町が美しいパノラマのようである。当地区は東西5.3km、南北4.7km、北西端を頂点とする、ほぼ二等辺三角形をなし、周囲18.2km、面積6.2km<sup>2</sup>である。人口はやや減少傾向にあるが、13,436人、世帯数は5,029戸、人口密集地であり、飯田の中でも人口では3番目で、世帯数では2番目である。組合加入率が70%（2011年10月現在）で、高齢化率が20%である。

〈図表24〉 鼎地区の歴史沿革

1875年	3村（山村、名古屋村、一色村）合併、鼎村発足。
1876年	長野県伊那郡鼎村。
1881年	稲井村を分離。
1889年	町村制施行、鼎村と稲井村が合併し下伊那郡鼎村が成立。
1954年	鼎村が町制施行して鼎町発足。
1956年	隣接する松尾村、竜丘村、伊賀良村が飯田市と合併したことにより、周囲が完全に飯田市となる。
1984年	飯田市へ編入

出典：鼎公民館提供資料『館報・写真でたどる鼎公民館半世紀の歩み』1999より筆者作成。

鼎地区は10区（西鼎、上茶屋、東鼎、下茶屋、一色、中平、名古屋、下山、切石、上山）から構成されており、鼎公民館発足当初から各区に分館が置かれ、現在10区すべてに分館が設置されている。各区の人口、世帯数、組合加入は以下の〈図表25〉の通り（2011年10月現在）である。この表によれば、人口355人、世帯数124の西鼎分

館から、人口2,758人、世帯数1,014の上山分館まで、分館の規模に差があり構成も一律ではない。

鼎地区の特徴としては、①面積でいえば飯田市市内では比較的小さい地区であり、②アップルロードをはじめ様々な要因で都市化が進み転入率が加速し、飯田市市内では有数の人口密集地帯となっていることな

どが挙げられる。

〈図表 25〉各区の人口・世帯数・組合加入

分館名	西鼎 分館	上茶屋 分館	東鼎 分館	下茶屋 分館	一色 分館	中平 分館	名古屋 分館	下山 分館	切石 分館	上山 分館
総人口(人)	355	419	440	469	1,084	1,644	1,920	1,964	2,383	2,758
世帯数(戸)	124	159	171	196	456	627	689	724	869	1,014
組合加入率 (%)	66.13	71.07	78.36	69.4	74.16	67.3	59.51	67.1	76.3	72.39

出典：2011（平成 23）年 10 月鼎公民館への聞き取り調査と配布資料より筆者作成。

## 2 鼎公民館の歴史的経緯と分館との関係

鼎公民館の歩みは〈図表 26〉の通りである。

〈図表 26〉鼎公民館の歴史的経緯

1948 年	鼎公民館設立。
1949 年	本館、分館設置。
1950 年	鼎村公民館条例制定。
1980 年	鼎町文化センター・併設鼎町中央公民館完成。
1984 年	鼎公民館に主事が 2 名、正規の市職員 2 名が配置され、文化・体育・広報の 3 委員制となる。
1995 年	主事 2 名のうち 1 名が臨時職員に。

出典：飯田市鼎公民館『館報・写真でたどる鼎公民館半世紀のあゆみ』1999, pp.115-140、鼎町史編纂員会『鼎町史 下巻』1986, pp.855-866 参照。

本館と分館の関係についてであるが、市内の公民館と同様、地区全体に関わる事業に関することを本館が担っている。本館には体育、文化、広報の 3 委員会があり、各委員会は分館より選出された委員により構成、運営されている。また、大きな事業の際は各分館の分館長と主事も含めた実行委員会を組織し事業を実施している。

地域ではあらゆる団体が活動を展開しているが、最も地域に密着し、地域のまとまりを重点において活動している組織が分館であると言える。

(馬麗華)

## 第 2 節 分館の組織体制

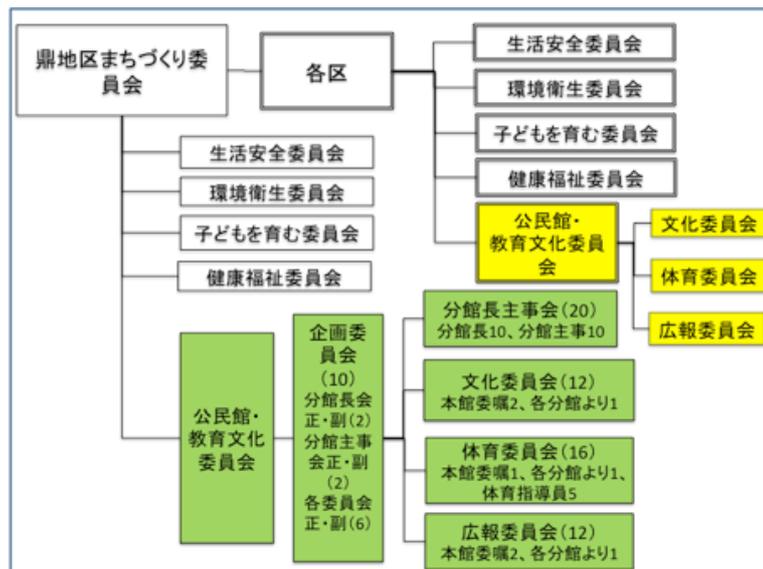
### 1 分館の組織

〈図表 27〉は、鼎地区の分館の組織体制を表したものである。

図の下方、文化、体育、広報委員会の 3 つの委員会と、分館長主事会、及び各組織の代表者で構成されるのが、本館の「公民館・教育文化委員会」である。一方、図の中央で示した、文化、体育、広報委員会で構成されるのが分館の組織体制である。括弧内の数字は各組織の所定の人数を示している。上郷地域と比較した場合、鼎地区のまちづくり委員会の特徴として、「公民館・教育文化委員会」とは別に「子どもを育む委員会」が存在し、青少年育成に関わる事業は、公民館・教育文化委員会と子どもを育む委員会双方が主体となり、運動行事等で連携している、という点が挙げられる。

役員体制としては、分館長、副分館長、主事、会計、各専門委員会の部長と副部長が総括を行い、文化委員会、体育委員会、広報委員会の部員は、それぞれの事業を専門的に行うか、もしくは、特に文化、体育、広報に区切らず、「専門委員」として、事業ごとに企画・運営に携わる形を取る。

〈図表 27〉 県地区本館・分館の組織体制



また、各部の代表は、県地区全体の文化委員会、体育委員会、広報委員会の構成員となる（〈図表 28〉を参照のこと）。

各区の役員構成の特徴としては、上郷地区と同様で、各役員によってその担い手が男女という属性によって偏りがある。分館長、部長などは、主が男性、副が女性、という場合が殆どである。ただし下茶屋分館のように、役職と男女差に拘らない区も存在している。

分館長の関係は、依然の役員経験を共有していたり、同級生である等、日常的なつながりの延長にある傾向が強い。

## 2 分館の財政

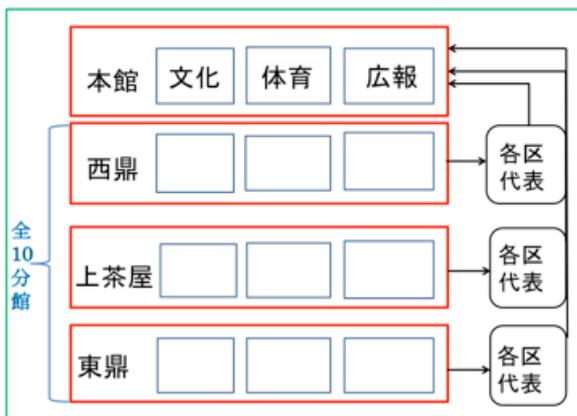
〈図表 29〉は、県地区の財源を示したものである。

点線は分館財政における主な収入を、細い実線が県公民館への分配・支出を、太い実線が分館への分配・支出を表している。

まず、収入の流れであるが、県地区における主な収入源は、①パワーアップ交付金（本館・分館費を含む）、②各組合から徴収した常会費・区費（分館費を含む）、である。この二つの経路を通じて、県まちづくり委員会に一旦集められ、それが本館・分館へと分配・支出される仕組みとなっている。①について、交付金は戸数によって各地区に振り分けられる。一戸当たりの額は各地区によって異なる。②会費については、地区により、「公民館費」として区経由で徴収する場合と分館が直接徴収する場合がある。

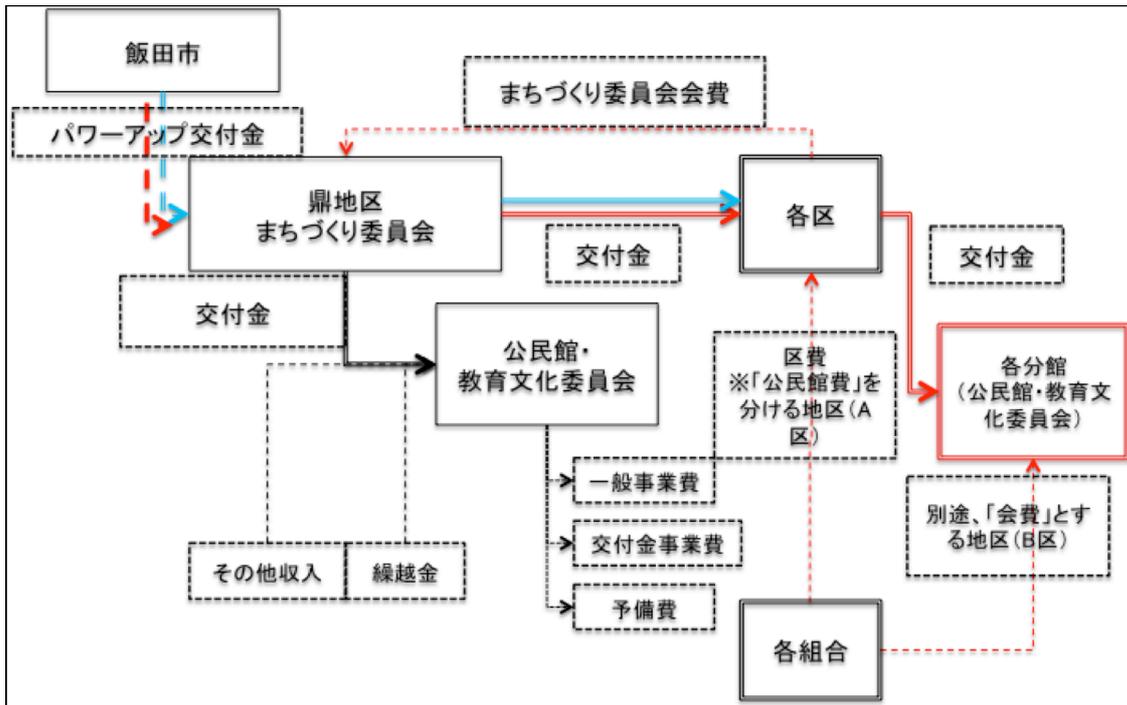
（歌川光一）

〈図表 28〉 県地区本館と分館の関係



分館長を担う男性については、その担い手は、40～70代と幅広い層に及んでいる。分館長に共通する特徴としては、上郷地区同様、分館役員を長期間担った経験があるという事である。また、それとも関わり、分館長と副

〈図表 29〉 鼎地区の財源



### 第3節 役員選出の方法

上述のように、鼎地区は 10 区で構成されており、それぞれの区に分館が条例公民館として設置されている。各分館では、分館長（1 名）、副分館長（数名）、主事（1 名）の役員によって構成され、実行機関として文化委員会、体育委員会、広報委員会が置かれている。分館同士の交流も大切にしており、各分館の夏祭りや運動会、文化祭の際はそれぞれ訪問しあい、情報交換を含め、参考になる点を自館事業に活かすなどしている姿が見られる。10 区の間で地域差があるが、地域の実情に応じた特色のある分館活動を展開しているだけでなく、役員選出の方法も地区により異なっている。

各分館役員の選出方法は、区全体で選ぶところや、班から選ばれた者を割り当てていく区が存在する。その共通点と相違点について、分館長、副分館長・主事・各部長、及び部員の選出方法に分けてまとめたものが〈図表 30〉である。まず、分館長の選出方法は、幾つかに分類できる。すなわち、前任館長の指名・依頼、50 歳以上の区民による選出（西鼎）、

各班から選出、区長・副区長の推薦による選考委員会での選出などに分けられる。そのなかで「選考委員会による選出」（上山、下山、上茶屋、切石、名古屋、一色、中平）が、その共通点として挙げられる。選考委員会の構成員には多少の違いはあるが、殆どが地域の有識者からなる。上山では選考委員会は各班から 2 名＋区長経験者等によって構成されている。

また、副分館長、主事や各部長の選出については、分館長の指名の場合（東鼎、上山、西鼎、下山、下茶屋、中平）もあり、前任の分館経験者で決定する場合（西鼎）もある。例えば、下山では分館長が決まれば、副分館長 2 名（うち 1 名会計）、主事を、分館長の指名によって選ぶ。部長は館長の指名、副部長は各班 1 名ずつ、任期は 2 年である。西鼎では副館長、主事は前の分館経験者が決定行為（運営委員は前の分館長）を行い、各委員長が委嘱され、副委員長は委員長の経験者（60 歳以上）である。

そして、文化部、体育部、広報部の部員は主に各区組合や班から選出される。例えば、

切石では部員は各班から1名ずつ出してもらい、館長が任命する。

分館役員とその選出方法の課題としては、少子高齢化の影響をうけ、分館役員の高齢化率が高く、負担が大きいこと（切石分館）、男性中心で女性が少なく地域運営に限界があること（下茶屋）などが挙げられる。

（馬麗華）

〈図表 30〉 県地区各分館役員選出方法一覧

分館	分館長	副分館長、主事、各部長	各部員
東 県	前任の分館長の指名	分館長の指名	各組合から選出
上 山	選考委員会による選出	副分館長と主事は分館長の指名 各部長は各班で選出後、互選	各班から選出
西 県	50歳以上の区民による選出	副分館長と主事は前任の分館経験者で決定、各委員長(部長)は委嘱され、副委員長(部長)は委員長の経験者から選出	分館長が委嘱
下 山	選考委員会による選出	分館長の依頼	各班から選出(各組合ごとの順番)
下茶屋	選考委員会による選出	副分館長は選考委員会による選出 部長は正副分館長による選出	分館長が指名
切 石	選考委員会による選出	選考委員会が選考して任命	各班から選出、館長任命
上茶屋	組合から選出(まわり番)	分館長が依頼	分館長が依頼
名古屋	選考委員会による選出	各班から選出	各班から選出
一 色	選考委員会による選出	各班から選出	各班から選出
中 平	区長・副区長の推薦により選考委員会決定	分館長指名	各班から選出

出典：各分館の配布資料と聞き取り調査のデータ（2011年6月24日 上茶屋分館長・県公民館長・名古屋分館副分館長・一色分館長、10月13日 切石分館長・下山分館長・上茶屋分館長、10月14日 中平分館長、10月27日 東県分館長・上山分館長、10月29日 西県分館長・上茶屋分館長への聞き取り）より作成。

## 第4節 分館の活動

### 1 各地区の分館事業

本節では、県地区の事業について、各地区の分館事業を整理しながら、共通する活動を説明する。

まず、本館事業について概観してみると、本館事業は主に文化事業、体育事業、広報事業に分類することができる。

例えば、県地区の2011(平成23)年度の事業計画<sup>61</sup>によると、文化事業としての「ふるさと再発見ワンデーマーチ」や、「飯田人形劇フェスタ2011 地区公演」、「ふるさと県ふれあい広場・文化祭」などの事業、体育事業として、「ニュースポーツ講習会」や、「信毎旗争奪県地区体育祭(ペタンク大会)」、「県地区縦断駅伝大会」、「県地区女性バレーボール大会」、「県公民館長杯ワンバウンドふらば～るバレーボール大会」等、広報事業としては主に館報「かなえ」年4回(375号・376号・377号・378号)の発行が挙げられる。

本館事業への参加は分館活動としても重視されている。たとえば、2010(平成22)年度県地区の「分館事業報告」によると、各分館は「ふるさと再発見ワンデーマーチ」や「ふるさと県ふれあい広場・文化祭」「信毎旗争奪県地区体育祭(ペタンク大会)」、「県公民館長杯ワンバウンドふらば～るバレーボール大会」、「県地区縦断駅伝大会」などほぼすべての本館体育、文化事業に参加していることがわかった。

次に、分館間の事業を比較すると、特に文化事業が多様であることがわかる。文化祭はほとんど各地区で行われており、芸能祭も盛んである。各地区の独自の事業を挙げれば、東県の人形劇フェスタ、サマーカーニバルや、一色の「竹宵」の会、下山のふるさと探訪、切石の「切石の歌」の普及などがある。いくつか例を見てみよう。

上山分館では、「みんなで宿題やらまい会」として、夏休みの始まりの時に小学生を上山公民館に集め、おやつなどを食べながら、2時間、地元のお年寄りや学校教員等をお願い

<sup>61</sup> 以下は県の2011(平成23)年度の事業計画より。

して、宿題を教わったり、終わった後にレクリエーションを催している。

下山分館では、一月に行われる新春放談会で、厄年を迎える「年男」「年女」が一年の抱負を、各年代から一人ぐらいつ代表を出し、それまでの経験や将来の夢を、5～6分話し、その後、新年の祝賀会を行う。

中平分館では獅子舞保存会の存在が着目される。人口1,636人、世帯数は626戸である中平地区は獅子舞を非常に重視している。2010（平成22）年度及び2011（平成23）年度の分館報「なかだいら」には、ほぼ毎号に獅子舞関連の記事がある。中平獅子舞は古来より尊重される青い幌とおかめ・きつね踊りが特徴である。おかめ踊りは小中学生の女の子が行い、招福祈願の様子が人気を集める。きつねは神の使いであり、獅子の行き先の邪気を祓う、という意味を賦与されている。2011（平成23）年度第82号分館報「なかだいら」によると、中平獅子舞は、全日本郷土芸能協会に認められて全国民俗芸能大会出演の推薦を受けたこと、そして、コミュニティの助成事業も受けたことがわかった。

上茶屋分館では、稲作、畑作が特徴的である。上茶屋分館は鼎地区の中で最も小さな分館の一つである。上茶屋分館の特徴的な事業としては、子どもたちを中心に稲作・畑作に取り込んでいることである。種を蒔き、苗床で育て、田植えをする。収穫まで雑草取り、成長の観察が続く。収穫祭を迎えるまで、根気よく稲を育てる。機械に頼らず、農薬を用いず、子どもたちの手で育てていくのである。この地域にはあまり農家が多くない、いわば商業地域である。休耕になる田圃を借りて稲作を教育に取り入れている。地域住民の協力なくしてはできないことである。文化祭と収穫祭では野菜を賞味し、餅つきをしたり「五平餅」を作ってお年寄りや子どもたち、皆に振舞う。子どもも大人も地域全体の絆づくりがしっかりできているので相互理解ができ、地域に住む高齢者へおかずを作って届ける福祉活動も自然に展開できるのである。子どもの参加は福祉活動を継続させるためにも重要な役割を果たすであろう。

最後に、名古屋分館で行われる芸能夏祭りについて見てみる。次頁の〈図表31〉は、2010（平成22）年度の名古屋芸能夏祭りの開催に参加・協力している団体である。この表により、名古屋の芸能夏祭りという分館活動はバドミントンクラブ、公民館OB会、壮年団、カラオケクラブ、小学校PTA、商工会名古屋支会、御輿愛好会、獅子舞保存会、三菱民謡クラブ、演芸クラブ、煙火保存会、鼎みつば保育園などの団体と一緒にを行うということがわかる。

続いて、体育事業について、分館ごとに運動会を行っているという点が鼎地区の特徴となっている。この経緯については、インタビューにおいて、以下のように説明されている。

600戸とか500戸とか大きな分館があるので分館ごとに運動会を毎年やっているんですよ。しかし、毎年分館ごとに運動会やっていて尚かつ町全部でやるというのはとても大変だっていることがあって（本館の事業としての一筆者補注）運動会っていうのはなくなったんですね。<sup>62</sup>

上述のように、現在鼎地区全体の運動会がなく、各分館で運動会は行われているというのが一つの特徴になる。ただし、運動会に関しては、分館の規模によって、行事が異なる。たとえば規模が小さい上茶屋分館は、選手の招集や、会場の確保が困難であるため、運動会に代わるものとしてマレットゴルフ大会を行っている。それ以外の鼎地区の分館は、分館ごとに運動会を行っており、およそ二年に一回、文化祭と交互に行っているところが多い。

ちなみに、広報事業についても、分館間に若干の違いが見られる。広報事業については、大体各分館は分館報を年に2～4回ぐらい発行し、たとえば、中平公民館の「なかだいら」分館報も一色分館の「区民だよりいっしき」も年間3回発行する。しかし、東鼎のみは人

<sup>62</sup> 平成23年度 東京大学大学院牧野研究室と飯田市公民館の共同学習（第一回） 2011年6月24日（金）9時～11時 菅沼利和氏へのインタビュー記録より。

員がないため、発行していない。このよう 説明されている。  
な東鼎地区の状況に関しては、以下のように

〈図表 31〉 名古熊芸能夏祭り 班・団体別参加・協力詳細

班・団体	催事・アトラクション参加		屋台等 運営協力			備考
	催事・アトラクシ ョン参加	準備品等	屋台協力	担当	公民館準備品	
1班	—	—	フライドポテト	班長	フライヤー 綿半レンタル	食材・マツブツ 油・塩・容器
2班	—	—	食券売り場	班長	食券・金庫・ つり銭	
3班	PTA ママさん		飲み物	班長	ストッカー(公 民館1・ひやけ 1借用)	
4班	* 「フォー・レビュ」	CD 持込	おにぎり (朝市)	班長	エース食産 仕入注文 朝市(計画中)	スタッフ弁当・ビニ ール袋
5班	—	—	食券売り場	班長		
6班	* ギターデュオ	個人的参加希 望あり	フライドポテト	班長		冷凍ストッカー(綿 半レンタル)確認
7班	(*参加)		飲み物	班長		
8班	—	—	おにぎり	班長		
バドミントン クラブ	—	—	かき氷	*	かき氷機・保冷 BOX(当日 am8:00)	氷1本(30cm)シロ ップ・容器
公民館 OB 会	—	—	イカ焼き・ 射的ゲーム	*	(テントのみ)	
壮年団	名古熊 伝統芸 能		焼きそば 他2~3種	支 部 長	(テントのみ)	
カラオケクラブ	カラオケショー	クラブ側にて 準備	—	—	—	音響/PA 協力
小学校 PTA	輪投げゲーム	内容確認	—	—	—	(人形劇準備 運 営協力)
商工会 名古熊支会	ビンゴゲーム		—	—	—	アトラクション賞品 提供協力
御興愛好会	子供御興	進行補佐・*	—	—	—	
獅子舞保存会	子供囃子(検討 中)		—	—	—	
三菱民謡クラブ	*(指導)	音楽テープ	—	—	—	7/4公民館にて指 導依頼
演芸クラブ	20周年 特別上演		—	—	—	
煙火保存会	煙火大会		—	—	—	合図打ち上げ依 頼(朝・開会宣言・ 開会式 3回)
鼎みつば保育 園	遊戯(確認)	音楽テープ	—	—	—	
千しゅう	—	—	他店と競合し ない物 2品ぐらい	*		アトラクション賞品 (飲食券)提供協力
康源	—	—	餃子・ から揚げ	*	フライヤー 借用希望	アトラクション賞品 (飲食券)提供協力 検討中
サレエペペ	—	—	*			

出典:2010(平成 22)年名古熊芸能夏祭り第1回実行委員会配布資料より転記。「\*」は個人名を示す。

うちはね、ここんとこ分館報出してないんです。あの、出せないんです。＜中略＞東鼎はついに女性の部長さんを2人つくりました。その中の広報の部長さんもそうなんですけども、なかなかそうすると家庭の生活との両立ということもあって、尚且つそういう館報も作ったこともないという。で、本館の方の館報を見ながら勉強しているといった所が本当の所で、今年その方が第一号を出して頂ければということで皆で頑張っって協力はしているんですが、ただ、出来ません。

このように、鼎の分館は、独立して活動するという意識が強く、その時々地域の住民の関心事や、地域課題に沿って学習活動も展開されてきた。分館の単独事業に対し、分館の役員間の交流や、各団体との交流も活発となり、住民の事業参加も増えてきた。規模は様々だが、小さな分館であっても、まとまりと行動力が発揮されている場合がある。

## 2 分館と地域団体との関係

地域団体は鼎公民館の発展、そして地域づくりには欠かせない役割を担っている。ここで、鼎の幾つかの地域団体を紹介する。

第一に、東鼎を除いて、ほぼ各区に存在する婦人会である。婦人会は地域に住む女性によって組織され、婦人会が活動している区では親睦、懇親的な性格が強いと思われる。各分館の例年の活動としての夏祭りや、文化祭などに多種多様な手作り料理を出すのは婦人会である。この意味では婦人会は分館活動に欠かせない役割を果たしている。例えば、今回の調査の折、ちょうど文化祭を行っていた分館がいくつかあったが、料理を作る役は主に婦人会に任せていた。このような婦人会活動に対して、今回のインタビュー中に出会った、ある女性は以下のように語っている。

私、一緒に婦団連の方を初めて経験させて頂いているんですけど、「こんなことをしているのか!」と思って、「あー、協力してもいいのかなー」でもやってみたいというのはちょっとある

んですけども、でもアパート住まいなので(苦笑)、そういう声も掛からないという形で、もし掛かれば、まあ時間があればの話ですけどもね。名前だけ入れてもらって、出れるときは積極的に参加させて頂くという考えはあるんですけども。

一方、2010(平成22)年度に上茶屋では、「食」を中心に据え、2004(平成16)・2005(平成17)年度の2年間にわたり進めてきた事業を、さらに通年農作業を体験できるように栽培野菜の種類を増やして行った。これは分館と小中PTAとが共催し、主食である米及び季節の野菜を栽培し、収穫、調理と一連の流れで体験した。子どもは地域の活力と地域づくりの未来であると思われる。上茶屋の進んだ上述の事業は、子どもの成長を重要な課題として意識している証である。

第二に、小規模ではあるが、各区に存在する壮年団である。多いのは東鼎や、上山で20人ぐらいであり、少ないのは特に下茶屋で7人ぐらいである。にもかかわらず、鼎の地域活動は壮年団を抜きにしては語れないほど地域に貢献してきた歴史がある。公民館活動をはじめ、ふれあい文化祭、スポーツの催し、華やかな芸能発表会、婦人集会、獅子祭りなどのイベント、幼児学級、高齢者学級、更には文化サークル、市民研究集会、学習会にいたるまで、壮年団の関わりが絆づくりの力となった。特に、壮年団による獅子舞の準備が、以下のように肯定的に捉えられている。

かしらを持って歩くのは男の子グループと、笛は女性、と分かりますし、あまり低学年だとちょっと難しいんですけども、壮年団の皆様が、舞いを教え込んでくれて育てるという体制がもう出来ているので、お父さんが壮年団に入っているお家は、もう絶対に、と思いますが、他地区から転入してみえた方は、遠くで見るような・両極端でいっちゃいますけれども、全体で見れば、下山に関しては、「やろうよやろうよ、みんなでやりましょう」ということで、忙しかろうが、その時間帯に合わせて親は子どもを送り出し・・・ということで、前向きに参加させて頂

いていると思います。

獅子舞壮年団、上山の場合で言うと獅子舞壮年団というところに、特に子どもたちだとかが集まって、この地域で色々な活動をする時の、<中略>、そういうやっぱり一番の下支えになるような集団みたいになつとるのかなあとか、

例えば文化委員会で納涼祭やる時なんかは、テントを上山の場合8梁だか張るんですよ。そうすると、先ほど言ったように70歳くらいのお年寄りの方も見えるもんですから、テント張る時には壮年団をお願いして手伝っていただくとか、真ん中に舞台を作るんですけども、そういう舞台も預けてあるところから運んでいただいて組み立てるとかっていうのは若い人をお願いしんと。

ただし、壮年団の結束力の強さゆえに、当事者からは、以下のような、懸念も示されている。

お祭りはやっぱり、獅子は保存会へ入ってもらうか、壮年団の団員が中心なんですけど、一般の方ってそんな中入りにくいっちゃうかね、お祭りは、で、秋のお神輿も壮年団がお神輿担ぐので、壮年団員がまあまたま知つとる人なら呼んでくるかしらんけど、だいたい主体は9割方壮年団員がいますよね、参加者はね、なかなか一般の方っていうのは参加しにくいっていうか。

また、今回のインタビューの中では、役員選出について、壮年団は以下のような文脈で言及されている。

だいたいその辺、壮年団だとか、<中略>まあ地域の色々やとって顔見知りだとか、同級生だとか、何かつながりがあって気心の知れた衆でないと、全く知らん衆を私たちがならしても、慣れるまでに一年ぐらいかかっちゃうんで<中略>実行部隊が壮年団なんでね、まあ私たちも壮年団をやとったしね、まあ消防もそれなりにやとったしね、獅子舞の付き合いもある中のつながりでやっぱり公民館にも頼み

やすいっちゃうか。

第三に、各区で最も人数が多い高齢者クラブである。たとえば、人口が非常に少ない区である東区(440人)においても高齢者クラブには約100人(70歳以上)がいる。高齢者クラブ、あるいは高齢者クラブは概ね65歳前後からの高齢者によって組織される。東区のように少子高齢化がかなり進んでいる区においては、少なくとも二つの問題が起こる。一つは、一人が二つ、三つの役職を兼任することが珍しくないことである。これはその人の能力を示す一方で、特定の人に大きな負担を強いる構図を示している。もう一つ厳しい問題は高齢者の「健康」問題である。「料理教室」と「健康教室」は非常に人気であるとも言える。この問題に分館も非常に重視しており、2010(平成22)年度下茶屋では「健康講話への講演」<sup>63</sup>という事業が行われている。これは主に健康増進のための知識・意識の向上を狙っている。また老化防止のための体操も取り入れながら楽しみながら誰でもできる内容で行った。区内のお年寄りを中心に多数の参加があった。

このように、体育祭、スポーツ大会などの公民館活動に力を入れる壮年団にせよ、夏祭り、納涼祭、文化祭などに手作り料理を提供する婦人会にせよ、子どもの健康の成長を守る小中PTAにせよ、子どもから高齢者まで、地域に住んでいる人々のために、分館と協力して絆作り、地域づくりに重要な役割を果たしている。地域の団体(壮年団、婦人会、PTAなど)と分館は、お互いに補い合って地域づくりに力をいれている。

もちろん、どの団体が地域づくりに最も貢献するのかという点については地域差があるものの、地域団体は地域づくりの有力な担い手として活躍し、分館活動は地域の紐帯を保ち、地域づくりの基盤になっているといえることができる。

<sup>63</sup> ひとつの事業名であり、下茶屋分館事業の一つである。2010年度『分館活動報告』中、「下茶屋分館 事業報告」を参照。

本節では、分館主事、分館長などの分館側のインタビューから地域団体と分館との関係を検討したが、次節では、本節でも取り上げた壮年団を含め3つの地域団体に直接インタビューを行い、そのデータから分館とそれらの団体との関係を検討する。

(娜仁高娃・歌川光一)

## 第5節 地域団体と分館との関係：婦人団体連絡協議会、鼎小学校・中学校 PTA、壮年団を対象として

本節では、婦人団体連絡協議会、鼎小学校・中学校 PTA、壮年団の3つの団体に焦点を当て、それらの団体と分館との関係を考察する。第2章の上郷地域の分館調査及び前節において女性が PTA 役員を通じて、男性が壮年団を通じてそれぞれ分館の役員となる傾向があり、それらの団体が地域の人材育成システムとして機能している可能性があることが指摘された。これを受けて、本節では PTA、壮年団を含む分館を取り巻く地域団体の側から、そのような人材育成システムとしての機能がどのように認識されているのかを検討したい。

本節の構成は、婦人団体連絡協議会、PTA、壮年団について、(1) それぞれの団体の概要、(2) 団体と地域・分館活動との関係、の2点から整理していく。

### 1 鼎地区婦人団体連絡協議会の概要<sup>64</sup>

婦人団体連絡協議会（以下、「婦団連」）は、「鼎地区内の女性の活躍と連帯意識の向上を目的に各団体の代表者及び、女性役員で集まり」、1980（昭和55）年に発足した。2011（平成23）年時点の参加団体は、鼎婦人会、日赤奉仕団鼎分会、食生活改善推進協議会鼎支会、JA みなみ信州女性部鼎支部、飯田商工会議所鼎支部女性部、鼎小学校 PTA、鼎中学校 PTA である。

主な活動としては、使用済食用油回収が挙げられる。これは、鼎地区において、土壌へ廃油の浸透や河川汚染が環境や農作物に深刻な影響

を与えていたため、行政の委託を受けた婦人会と消費者の会が、1994（平成6）年より開始したものである。具体的には、年に一度、鼎地区5～6ヶ所（2011年の場合は、鼎東保育園前、コミュニティ防災センター、鼎自治振興センター、切石会館、名古屋公民館、鼎公民館）で婦団連側が数名で各家庭から持ち寄られた使用済み食用油をポリタンクに回収したのち、それを松本市の知的障害者授産施設「共立学舎」に預け、粉石鹼・固形石鹼等の原料とするほか、同市の清掃車両の燃料としても用いられることになっている（2011年には950リットルの使用済食用油を回収）。

その他にも、喫緊の課題や、地域・社会の中で関心が持たれているテーマについて講演会、見学会、集会等の機会を設け、地域住民との交流を図っている（過去の活動内容として、末尾の〈図表32〉を参照のこと）。

### 2 地域・分館活動との関係

今回インタビューにご協力いただいたA氏は、一時、療養のために関東に転出した時期を除いて、鼎地区で生活しており、地区に愛着を持ち、「恩返し」をしたいと述べる。以下のように、地域の将来を見据えて、豊富なネットワークを活かしながら、結婚相談員としてのキャリアも積み重ねている。

今壮年団と消防団の皆さんをまとめて、実行委員になってもらって、婚活イベント（をしているん—引用者）です。それはなぜかって言ったら、まず将来考えたとき鼎の子どもが減ってきちゃう。だから若い方たちが元気を出して、やっていこうって言って。〈中略—引用者〉結婚しない、っていう人はね、話ができない。だからいくら相談員がお見合いさせていただいたって、断られるのは、話がつながらない（からな—引用者）ので、いくらいい人だと思っても、つながっていかない。断られる。それで、これはまずい、ということで、カラーコーディネート講座をやったり、良い男になりなさい、と（言う—引用者）（笑）。

一方、鼎地区の地域活動で女性が役員等に

<sup>64</sup> 配布資料「H23 活動内容引継ぎ資料 婦人団体連絡協議会の活動について」及び同団体A氏へのインタビューを参照。

なることに関しては障壁がある、と述べる。A氏によれば、会議等を含む「おつきあい」を多くこなす必要がある役員に、女性が就くことは、家庭生活に影響が出る可能性に加え、以下のような状況があると述べる。

鼎の場合はね、人材豊富。人口があつてこれだけの地域だから、やはり良い人材の、男性の皆さんが育ってきてるじゃないですか。いろいろして

きて職場を退職して、そういう方たちが多いじゃないですか。＜中略＞はっきり言ってこれだけの規模のところ、じゃあ女性が頭に立ってそれは、大変。これだけの人材があるところに女性が入ってきて、ほんとに醜いあひるの子じゃないけど、つつかれて、まいっちゃう。それだけに、勉強してきてないと、この地域の中のことを。だから、「副」（の役割—引用者）ならいいんじゃないですか。「副」なら女性の立場で。

〈図表 32〉 婦団連の活動内容

1995	廃油での石鹸作り開始
1998	講演会「身近なことから考える環境問題」
2000	廃油回収で協力を得ている松本市「共同学舎」への視察研修
2002	講演「健康な地域づくりをめざして～健康グレードアップながの21の推進～」ましゅ&Kei氏
2004	鼎まちづくりを考える集い「新潟中越地震から学ぶもの」(鼎地区自治防災と共催)
2005	地震防災講座①「地域の防災対策について」 地震防災講座②「地震にそなえて その時どうする」
2006	講演会「懐かしき日本の歌を歌おう」田中吉徳氏
2008	NPO法人くれよん エコステーション見学  環境学習会「家庭の取組みから環境づくりを考える」飯田市環境アドバイザー・松澤肇氏 アフィニスくつろぎコンサート 交流会での調理協力 鼎まちづくり委員会との懇談会
2009	鼎地区環境衛生委員会 女性部研修会参加  環境学習のための施設見学(北の原配水池、松尾浄化管理センター、グリーンバレー千代、前田産業) 鼎地区まちづくり委員会との懇談会  環境講演会「廃油用油ゼロのまちづくり」(株)セラネットシステム・島田洋治氏
2010	環境学習のための施設見学(環境衛生委員会との共催) 鼎地区環境衛生委員会 女性部研修会参加 鼎地区まちづくり委員会との懇談会・意見交換会  講演会「地域における男女共同参画の推進」飯田市男女共同参画課係長・大蔵豊氏

出典：配布資料「H23 活動内容引継ぎ資料 婦人団体連絡協議会の活動について」より筆者作成。

ただし、分館役員のジェンダーバランスに対しては、以下のような展望も持ち合わせている。

(昔、ある公民館で—引用者) やはり男性ばかりだと飲み会が多くて、それで、風評が悪かったの。公民館に行きやお酒ばか呑んで、「お父さんたちは…」、ていうのがあって。やっぱり、そういうのじゃなくて公民館でまた交流してく

っていう風に、話をして、っていうのでいいんじゃないかな。＜中略＞女性が、なんかその感性でこうやって良い形にしていく。やっぱり何にも出ないと、男の方だけだと(無理がある—引用者)。なんか、女の人の意見が入っていきっていうのがないとね。

(歌川光一)

### 3 鼎小学校・中学校 PTA の概要

鼎小学校・中学校は「児童の保護者ならびに教師を会員とする」組織として PTA を設置している<sup>65</sup>。PTA の目的は「会員の協力によって、会員相互の教養を高めるとともに、児童の幸福をすすめ、教育を振興すること」である<sup>66</sup>。PTA は、〈図表 33〉のように学校を基点とする本会と、鼎地区の 10 区（切石、中平、上茶屋、下茶屋、上山、下山、一色、名古熊、西鼎、東鼎）それぞれを基点とする支部に分かれており、中学校 PTA には 2 つに加えて学年委員会が設置されている。

〈図表 33〉 PTA に設置された部会・委員会

鼎小学校	鼎中学校
1 本会 (総務部、事業部、学年部、支部長会。但し、事業部は広報部、教養部、施設対策部、 <u>校外生活指導部</u> 、交通安全部の 5 つに分けられる)。	1 本会 (総務部、教養部、広報部、生活指導部、施設対策部、進路指導部、 <u>子育て委員会</u> 、学年委員会)
2 支会 (10 支部)	2 地区支部 (10 支部) 3 学年委員会 (各学年)

〈図表 33〉内、太線・下線を施した校外生活指導部と子育て委員会が、公民館との共催行事への参加を企画・運営している<sup>67</sup>。PTA が行う事業の中で公民館と共催して行う事業は少なく、鼎地区体育祭、鼎ふるさとふれあい文化祭、鼎地区スポーツ大会などに留まっている。

### 4 地域・分館活動との関係

支会あるいは支部が分館単位に置かれていることから、一見、PTA は比較的分館活動

と連携、協力していると考えられる。しかし、本調査で行った PTA 役員経験者へのインタビューからは、PTA の活動が分館や地域の活動と必ずしも連携しているものとして捉えられているのではなく、あくまでも子ども及び学校を介した繋がりとして認識されている可能性が窺える<sup>68</sup>。

(引用者注：分館の行事と PTA の関わりは) 多いとは思うんですけども、それは地区の動きになるので、PTA がどうこうというわけではなくて、子どもを持っている親御さんが一緒に参加するという形になっているので、PTA と地区のついでというところへんが、なんとなく、役割がしっかり分けられているので<sup>69</sup>。

また、一戸建てに住んでいる、あるいはその地域に「根っこがある」(人間関係ができてい)人は PTA と地域の活動を兼任できるが、アパートや借家などの居住形態をとる場合は、地域の活動に従事することが難しいという点も指摘された。

アパートなので、地区のそういう昔からの行事とかに声が掛からないというか、回覧板が回ってこないんですよ。だから、PTA と地区が関係したような行事に対しては、やはり(引用者注：PTA の)支部長さんの方から、お便りは来るんですけども、(引用者注：PTA 活動ではない地区独自の)草取りとか清掃とかということに関しては、ハッキリ言ってアパート住まいとか、マンション住まいの方に関しては、連絡が来ないので、ちょっと孤立したような形ですね。遠くから見てる・・・みたいな。よそから来た者と同じ部類になってしまいますので。地域の行事の獅子舞とか、そういった話は会議とかで話

<sup>65</sup> 「PTA 会則」『鼎小学校 PTA 総会資料』平成 23 年度 (配布資料)、「PTA 会則」『鼎中学校 PTA 総会資料』平成 23 年度 (配布資料) を参照。

<sup>66</sup> 同上。

<sup>67</sup> 「平成 23 年度 PTA 事業計画」『鼎小学校 PTA 総会資料』(配布資料)、「平成 23 年度 鼎中学校 PTA 事業計画」、「鼎中学校 PTA 施行細則」『鼎中学校 PTA 総会資料』(配布資料) を参照。

<sup>68</sup> 本調査では、PTA 役員経験者 3 人のみをインタビューとしている為、この調査結果をただちに一般化することは出来ない。従って、ここで行う考察はあくまでも仮説的なものであり、今後、更に調査を重ねる必要がある。

<sup>69</sup> 以下、引用するデータは鼎小・中 PTA 役員経験者へのインタビューによる。尚、実名については、インタビューの要望により非公表とする。

は聞くんですけども、どういう流れでどういう風ってというのは、もうポカーンとしたような聞き方になってしまっていますね。

このように、鼎地区出身で持ち家の場合は、地域活動の情報の入手や活動への従事が、自分の親から必然的に受け継がれる場合がある一方で、居住形態によっては、地域活動への接触が困難となる場合があることが示された。従って、住民がPTAを介して分館活動、地域活動へと結び付けられていく可能性はあるものの、それが可能となるためには前提条件があることも明らかとなった。

## 5 壮年団の活動の概要

鼎壮年団とは、「団員相互の親睦連携を密にし、生活の充実完成を期すると共に、鼎地区の振興に寄与することを目的とする団体」である<sup>70</sup>。団員は、鼎地区在住の20歳から40歳までの男女で構成されており、40歳から50歳までは準団員となる。また、壮年団は10の支部（下山支部、東鼎支部、西鼎支部、下茶屋支部、中平支部、上茶屋支部、切石支部、上山支部、一色支部、名古熊支部）とそれらを統括する本団によって構成されている。

本団の役員は団長1名、副団長2名、会計1名、担当部長各1名（社会広報部長、体育部長、地域振興部長、文化部長）、事務局長4名、事務局補佐1名、幹事2名で構成されており、それぞれの役職は10支部から均等に1名ないし2名ずつ選出されている。4つの担当部はそれぞれ、分館の文化・体育・広報部と類似した形で担当する事業が割り振られており、社会広報部は団報、HP、PR紙の作成、地域振興部は鼎地区の財産区を整備する山林愛護会の活動の推進、体育部は支部対抗のスポーツ大会やOB交流会の企画・運営、文化部は文化祭の企画・運営を担っている<sup>71</sup>。

各支部には支部長が置かれ、団務の連絡・

予算の修正、事業執行などを行っている。2011（平成23）年時の各支部の正団員の数は〈図表34〉の通りである。

〈図表34〉各支部の正団員の数（平成23年）

支部名	正団員数
中平支部	25名
上茶屋支部	13名
切石支部	39名
上山支部	28名
一色支部	20名
名古熊支部	40名
下山支部	37名
東鼎支部	10名
西鼎支部	11名
下茶屋支部	9名
合計	232名

（出典）「平成23年度 本団役員・支部長名簿」『鼎壮年団 平成23年度新年度総会資料』（配布資料）から転記。

各支部が行う地域活動は、以下の〈図表35〉のように、非常に活発である。特に文化祭や納涼祭、獅子舞フェスティバルへの参加など、分館が取り組む事業を連携して行っていることが分かる。

一方で、本団の事業は、支部の事業ほど活発ではない。以下の〈図表36〉は、2011（平成23）年度の本団の事業計画案を示している。本団は、鼎地区での体育祭、文化祭、そして10支部対抗でのスポーツ大会等、主にまちづくり委員との連絡調整を含む全市的な事業を行っている。表内の太字・下線の事業は公民館と協力して行っている事業であり、その他は壮年団の単独事業である。

## 6 地域・分館活動との関係

以下では、インタビューデータをもとに壮年団が地域・分館活動といかなる関係をもつ団体であるかを検討したい。インタビューからは、壮年団が分館及び本館と密接な関係を持ち、地域自治や地域活動を積極的に牽引する存在であることが読み取れる。

<sup>70</sup> 鼎壮年団 HP を参照。

（[http://www.geocities.jp/kanae\\_souendan/dansoku.html](http://www.geocities.jp/kanae_souendan/dansoku.html) 最終アクセス日：2012年4月9日）。

<sup>71</sup> 「平成23年度 鼎壮年団 予算（案）」『鼎壮年団 平成23年度 新年度総会資料』（配布資料）を参照。

〈図表 35〉各支部の活動内容 (平成 22 年度)

支部名	活動内容
中平	新年度総会、屋台組立、お花見、矢高神社祭典 (春季・秋季)、松川河川敷清掃 (春季・秋季)、区民祭り参加、全国獅子舞フェスティバル参加及び支部親睦旅行、新年会、節分行事、年度末総会
上茶屋	新年度総会、矢高神社祭典 (春季・秋季)、四支部交流会、切石支部との交流会、鼎縦断駅伝大会参加、支部対抗ソフトボール大会、全国獅子舞フェスティバル参加、上茶屋収穫祭協力、忘年会、節分厄払い、研修旅行
切石	天伯神社春季祭典、親睦旅行、獅子舞フェスティバル PR 活動、切石公民館ペタンク大会参加、妙琴公園美化作業、支部対抗ソフトボール大会参加、切石区秋祭り参加、全国獅子舞フェスティバル参加、二支部交流会 (上茶屋)、元旦獅子舞、新年会、節分、厄除け、支部内歴代支部長会、年度末総会
上山	矢高神社春季祭典獅子舞奉納、上山区区民親睦スポーツ大会、親睦ボウリング大会 (新入団員歓迎会)、四支部交流会 (一色・上茶屋・西鼎)、上山区納涼祭参加、人形劇交流会、矢高神社秋季祭典、支部対抗ソフトボール大会、鼎財産区下草刈り協力、全国獅子舞フェスティバル参加、南信州獅子舞フェスティバル参加、支部忘年会、新春放談会、壮年団研修旅行、上山区文化芸能祭参加、鼎ワンバウンドふらばーるバレー、支部団報発行、支部年度末総会
一色	支部新年度総会、春季祭典 (奉納舞)、四支部交流会、一色区民祭り参加 (屋台)、支部 OB 交流会、支部対抗ソフトボール大会参加、支部旅行、名古屋支部との交流会、南信州獅子舞フェスティバル参加、支部忘年会、節分行事、支部年度末総会
名古屋	新年度総会、名古屋神社春季祭典獅子舞奉納、鼎体育祭、支部ソフトボール大会、名古屋夏祭り、名古屋神社秋季祭典神輿

	奉納、全国獅子舞フェスティバル、一色支部との合同ボランティア、研修旅行、家族ボウリング、年度末総会・団報発行
下山	新年度総会、飯田お練り祭り、送別会、遠山ヨイヨイ祭り参加、矢高神社春季祭典獅子舞奉納、魚のつかみ取り、新入団員歓迎会、鼎体育祭参加、下山区納涼祭屋台出典、木札作成、矢高神社秋季祭典参加、敬老会祝舞、支部対抗ソフトボール大会参加、下山区運動会参加、研修旅行、全国獅子舞フェスティバル参加、下山区ふれあい文化祭協力、壮年団 70 周年記念事業協力、下山区新春放談会参加、新年会、節分行事、下山区芸能祭参加、四支部交流会、文集「喜葉」発行、年度末総会
東鼎	新年度総会、フラワータウン in ひがし区内奨学生との交流会、東鼎区夏祭り模擬店出典、矢高神社秋季祭典、支部残暑払い焼肉、東鼎区文化祭模擬店出店、支部新年会、四支部交流会 (下山、西鼎、下茶屋)、支部年度末総会
西鼎	新年度総会、お花見、鯉のぼり祭り協力、研修旅行、下茶屋支部とのゴルフ&マレットゴルフ大会、へそかあにばる協力、四支部交流会 (上茶屋、上山、一色)、いいだりんごん参加、矢高神社秋季祭典、西鼎大運動会、四支部交流会 (東鼎・下山・下茶屋)、節分行事、年度末総会
下茶屋	新年度総会・観桜会、ゴルフ&マレットゴルフ大会 (西鼎支部との交流)、葉月会との交流会、矢高神社秋季祭典神輿奉納、歴代支部長会、支部対抗ソフトボール大会、研修旅行、忘年会、四支部交流会 (下山・東鼎・西鼎)、年間を通じての区・公民館行事への参加

出典:『鼎壮年団・団報』第 39 号, 2010 年度を転記。

〈図表 36〉 2011（平成 23）年度 鼎壮年団 事業計画（案）

	本団	社会広報部	地域振興部	体育部	文化部
4 月	オール部員会 新年度総会（東 北関東大震災義 援金協力）				
5 月					
6 月				鼎体育祭に協 力（ペタンク大 会）	
7 月	市政懇談会	まちづくり 委員 市議と の懇談会			
8 月				支部対抗スポー ツ大会（ソフ ト・10 支部懇親 会）	結婚相談委員 会に協力（婚活 パーティー）
9 月	歴代団長会				結婚相談委員 会に協力（カラ ーコーディネ ート講座）
10 月	南信州獅子舞フ ェスティバル協 力		松川入財産区 と打ち合わせ 兼部会 松川入財産区 枝打ち作業		
11 月					鼎文化祭に協 力・出店
12 月					
1 月	新春放談会			OB との懇親会	
2 月	4 地区交流会 年度末総会	総会までに 団報の作成 発行			
3 月					

出典：『鼎壮年団平成 23 年度新年度総会資料』（配布資料）から筆者作成。

壮年団というのは各分館活動・公民館活動と切っても切れないもの。人材を輩出する機能も含めて、直接的に関係はないんでしょうけども、公民館との関係は付かず離れずというか。(中略)  
(引用者注：地域活動や地域自治が) 壮年団がブンと言ったらあんまり動かない部分があって<sup>72</sup>。

では、公民館と密接な関係にある壮年団はどのような経緯で団員を確保しているのか。以下では、地域での声掛け、顔見知りからの勧誘といったノンフォーマルな形で、新団員を増やしていくことが指摘されている。

(引用者注：地区の住人の中で壮年団には) 6割か半分前後が入っています。それもまたやくぎな世界であってですね、例えば私が入ってなくて、同年でともに本団をやった仲なのですが、例えばAさんが入っていた。で、上山にいますよね。で、私が入ってなくて、上茶屋にいた。でも同じ世代って大体小学校とか保育園で顔を見るじゃないですか。そうすると、壮年団入ってないの？とかいう話になって、ここの上山の人が上茶屋の人の壮年団の人に行き会った時、あの福澤に行き会ったけど、壮年団入ってないの？とかいう話になって、声がかかってですね、外堀が埋まってくみたいなどころはありますね。

このように、壮年団が公民館と共に地域を牽引する役割を担っていることが指摘された一方で、その役割の維持が困難となっている状況も示された。

(引用者注：本団員の数が) 減ってきた要因の一つには、まちづくり委員会だとか、公民館の影響もちょっとあるのかなという感じもしないのではないかなと思います。例えば、婚活パーティ。それは独身の壮年団員が多くて、壮年団として課題を持っていけば、当然それは受け入

れOK だと思うのですが、カラーコーディネート講座ですとかは公民館にやらされて、何人動員しなきゃいけないということが出てきている。先ほど言った、自主的な活動で、楽しくなければ出てこなくなるし、楽しければ人を誘うし、おう入れよ、とか言えるのですが、そういう部分が危惧されるころかなと。後輩達の活動の中の発言を、集まった時の発言を聞くと、今度のあれ出れる？婚活、カラーコーディネートのあれ出れる？何人て言われてるんだよ、それなのにでなきゃいけないの？という発言があるなかで、言うとは、非常に団員の減少化に拍車がかかりかねないか、ということは危惧するころかなと思います。

本節冒頭で記したように、壮年団は「団員相互の親睦連携を密に」することを目的としており、何よりも団員が楽しみながら交流を持つ事が主眼とされている。しかし、上記のデータにみるように、地域自治組織導入による自治の形が変化した為に、密に結びついていた公民館と壮年団の間にズレが生じているという課題が生じていることが明らかとなった。

(中村由香)

## 第6節 考察

以上、鼎地区の分館の組織・体制、実践について検討してきた。

鼎地区の各分館では、他の地区同様、役員選出に際して、一筋縄では行かず、学校や壮年団を始めとする、既存の「友だち」、「先輩—後輩」つながり等をも活用しながら、根気強い説得を通して選出される場合が多い。特に、女性が役員になった場合、家庭との両立が困難、という状況も垣間見られた。

一方、実際の分館活動に際しては、一般的に想定される、余暇活動への関わり方をズラしながら、ダイナミックに展開されていると言える。

今、余暇活動に対して、想定される主体と対象、そしてそこで求められる態度は、以下(図表37)のように整理することができる。

<sup>72</sup> 以下、引用するデータは、鼎壮年団長の山下誠氏、壮年団員OBの福澤好晃氏へのインタビューによる。

〈図表 37〉余暇活動の主体・対象・求められる態度

	文化(正統文化)	趣味(生活文化)	レジャー(消費文化)
市民	教育	たしなみ	
住民	たしなみ	熱中	熱狂
大衆		熱狂	気晴らし

(注) 網掛けは、語義的に定義され得ないことを示す。

〈図表 37〉において、太線部で示した「市民—教育」、「住民—趣味」、「大衆—レジャー」が、余暇活動の原型と言える。すなわち、地域の図書館、博物館、文化ホール等は市民への「教育」の媒体であるし、公民館やその他生涯学習施設、サークルにおいて住民は趣味活動に「熱中」するし、都市部に出て、飲食店や買い物、アミューズメントパークに赴いて「気晴らし」する。

しかし、分館活動は、このような固定化された図式を無化する。例えば、獅子舞保存の活動は、社会的に見れば、地域の伝統芸能の保存であり、市民が「教育」し合うことによって継承されていくものではあるが、その過程では、子どもたちは、住民の大人に学びながら、楽器の「たしなみ」を身につける必要が生じ、お祭り・フェスティバルで披露することで、「熱狂」する。また、文化展は、各住民が「熱中」している趣味活動を披露することが元来の目的であるにせよ、主催関係は、よりよい企画を立案する過程で、市民として「教育」され、実際の文化展では、食事やアルコール、ゲームを交えながら「熱狂」する。すなわち、分館活動は、「たしなみ」「熱狂」を交えながら、余暇活動の構造を柔軟化している。

ただし、このように、各イベントの意味が多義的であるからこそ、内容が肥大化し、主催者、参加者にとって負担が大きい、という声もある。例えば、インタビューの中で、以下のような状況が説明された。

しかし、あの、今回の〇〇(イベント名—引用者)ですけどね、これも賛否両論あり、今まではお昼を食べてそれで色々獅子舞とかイベントをやって、また午後競技をして、最後に全員で

集まってその、お遊びと言いますか、ゲームをしながら大体4時ごろまでかかったんですよ。これを私は午前中に全て済ませて、お昼も食べないでただ、お昼を渡す、おにぎりを渡すような方向にしたんですよ。そうしてまあそれもいいという人もいますし、やはり、いろいろ、和を深めるのであれば、その、宴会のようなものでやった方がいいんじゃないのか、という意見もありますね。

以上のように、役員継承者の問題の他に、分館関係者の時間的制約と分館における余暇活動の多義性に、どのように折り合いをつけるかが、論点の一つとして浮かび上がってくると言えるだろう。

(歌川光一)

## 第4章 龍江地区の調査結果

本章では、龍江地区の調査結果について論じる。本章は、具体的に次のような構成を取っている。(1) 龍江地区の概況、(2) 分館の組織体制、(3) 分館の財源、(4) 分館役員の選出方法、(5) 分館事業の内容、(6) 分館と地域団体との関係、(7) 分館の特徴と課題、である。本章では、以上の7点から龍江地区の分館体制を概観する。

### 第1節 龍江地区の背景

#### 1 龍江地区の概要

龍江地区は、長野県南部にある飯田市の南、天龍川に接して東岸に位置し、標高 500m 前後の河岸段丘の丘陵地であり、農業振興地域に指定されている地区である。そのため、新たに一戸建てやアパートを建設することが困難であり、地区外から移住してくる人が少なく、比較的人口移動が低調な地区である。

龍江地区は、2011（平成 23）年 4 月現在、人口は 3,073 人、世帯数は 984 戸であり、最近は少子高齢化によって、若者の減少、常会戸数の減少が深刻な問題となっている。龍江地区の各区の状況は〈図表 39〉の通りである。

龍江地区の基礎単位は、班・組（「隣保班」「隣組」）⇒常会⇒区（第 1～4 区）⇒龍江地区、となっている。龍江地区における最小単位は、「隣保班」や「隣組」と呼ばれる「班」や「組」である。その「班」「組」が 2～5 ほど集まって「常会」を形成し、さらにその「常会」が 8～9 集まって、「区」（第 1～4 区）を形成している。

〈図表 38〉龍江地区各区の状況(2011 年 4 月現在)

	人口(人)	世帯	常会数
第1分館(区)	811	254	9
第2分館(区)	884	265	8
第3分館(区)	866	301	8
第4分館(区)	512	164	9
地区全体	3,073	984	34

出典：龍江公民館提供資料「分館の役割と位置づけ」を参照。

龍江地区には、この「区」に、「地域づくり委員会」が存在している（例えば、「龍江一区地域づくり委員会」のように）。さらに、ここで言う龍江地区における「区」は、いわゆる「自治会」に相当するものであり、「区＝自治会単位」であると理解できる。

さて、龍江地区は、「みんなで考えみんなでやる地域づくり」を合言葉に、「だれもが住みたい地域 “みんなで創る 豊かで元気な住みよい龍江”」というスローガンを掲げている。『第3次龍江 21 構想』によれば、龍江地区の望ましい姿を表すテーマとして、①人が行き交う和みの地域づくり（「憩」）、②便利で豊で住みよい地域づくり（「豊」）、③健康で生き活きと暮らせる地域づくり（「活」）、④安全で安心して快適に暮らせる地域づくり（「安」）、⑤思いやりを持って支え合う地域づくり（「絆」）、を挙げ、この 5 点を地域づくりの核に据えている<sup>73</sup>。

龍江地区の特徴については、産業面では、農林業や果樹産業が基盤であり、さらに精密機器工業も点在していることが挙げられる。観光面では、天龍峡や、船下り、温泉が、文化面では、人形浄瑠璃「今田人形」（選択無形文化財）や「事念仏・事の神送り」などの歴史的な伝統文化・行事が数多く残っていることが挙げられる<sup>74</sup>。

#### 2 龍江公民館の歴史的経緯

龍江公民館の歴史的経緯は、〈図表 39〉のようになっている。龍江公民館の歴史は、1947（昭和 22）年 12 月 25 日に始まる。設立開館時の公民館長は龍江小学校長であり、役員はすべて地域・団体選出で構成され、村の行政職員は皆無であった。1948（昭和 23）年になると、区ごとに分館を設置するようになり、同年 8 月には、「龍江の新聞」（第 26 号から「龍

<sup>73</sup> 龍江地域づくり委員会『第3次龍江 21 構想』龍江地域づくり委員会, 2010. なお、「龍江 21 構想」は、1989（平成元）年に第1次構想が、1999（平成 11）年に第2次構想が策定された。

<sup>74</sup> 龍江地域づくり振興委員会『伝えたいこと 残したいもの—龍江の伝統と文化』龍江地域づくり委員会, 2008.

江新聞」と改称)が創刊、翌年には、「龍江公民館条例」を制定し、6部門(総務、産業、図書、芸能、社会、新聞)が組織された。

〈図表 39〉 龍江公民館の歴史的経緯

1947年12月25日	設立開館 ⇒公民館長は龍江小学校長 ⇒役員はすべて地域・団体選出で構成(村行政職員は皆無)
1948年	各区に分館(第1~4分館)設置 ⇒「本館発足に続いて分館が発足して、公民館活動を末端から始めることができたのは、何より幸いであった」(『龍江村誌』)
1949年8月1日	「龍江の新聞」(第26号から「龍江新聞」と改称)創刊号発刊(1,000部)
1949年11月	「龍江村公民館条例」制定 ⇒6部門(総務、産業、図書、芸能、社会、新聞)の組織が確立
1964年3月1日	飯田市と合併

出典：龍江公民館提供資料「龍江公民館の概要」、龍江村誌編纂委員会編『龍江村誌』龍江村誌刊行委員会,1997より筆者作成。

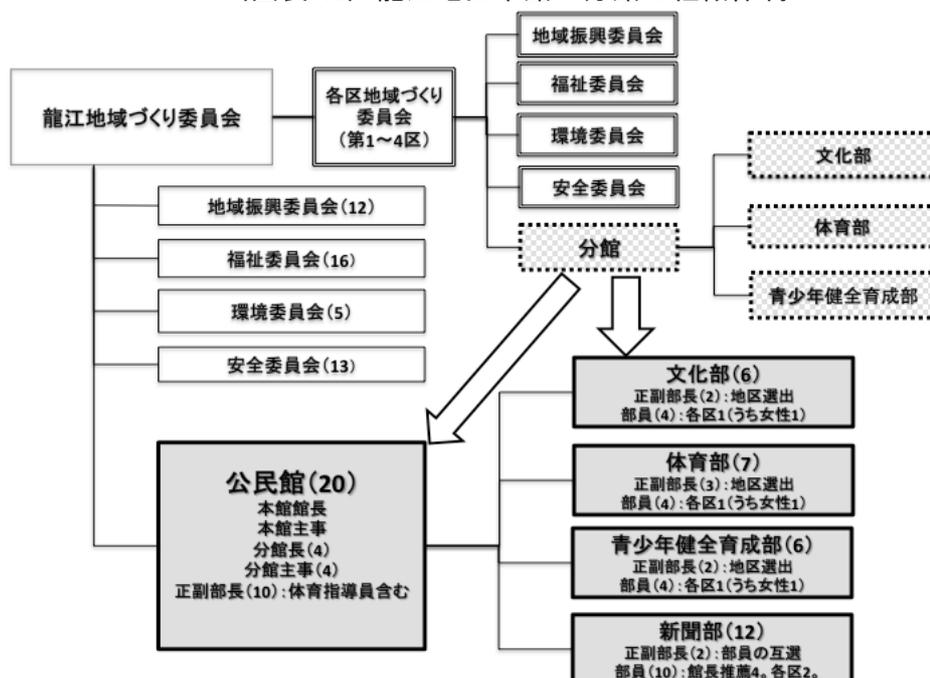
1964(昭和39)年には、飯田市と合併をし、「飯田市龍江公民館」となった。飯田市との合併に関して言えば、前記の上郷地域と鼎地区が飯田市との合併に際して連合自治会を組織したことは異なり、龍江地区においては、飯田市との合併に際しては龍江村全体の連合自治会が存在しなかったことは特徴の1つと言える。その後、2007(平成19)年4月1日に、「飯田市龍江公民館」は、「龍江地域づくり委員会」に統合され、5委員会の1組織となり、現在に至っている。

## 第2節 分館の組織体制

### 1 分館の組織

〈図表 41〉は、龍江地区の分館の組織体制を表している。太線で囲った箇所が、いわゆる本館の組織体制であり、点線で囲った箇所が分館の組織体制である。括弧内の数字が各組織の所定の人数を示している。

〈図表 40〉 龍江地区本館・分館の組織体制

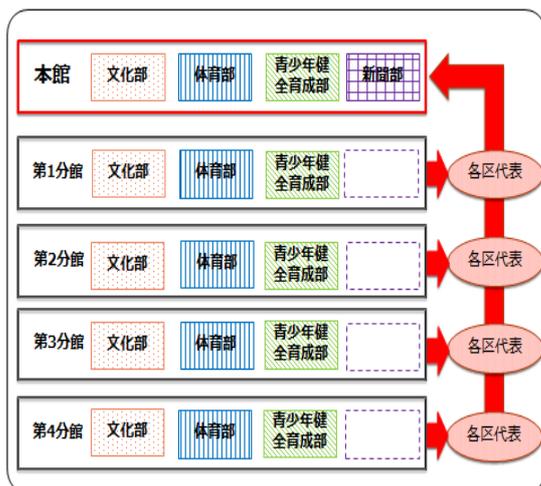


出典：龍江公民館提供資料「『龍江』地域自治組織図・構成」、聞き取り調査を参照し作成。

龍江地区の分館組織は、〈図表 40〉の通り、本館の組織体制に倣う形で、文化部、体育部、青少年健全育成部、(ただし新聞部は除く)となっている。龍江地区における公民館組織の新聞部は少し特殊な体制である。すなわち、龍江地区では、分館の組織体制レベルにおいては、新聞部は組織化されていない。しかしながら、「第3節 分館役員の選出方法」で記述するように、各区の役員選出に際しては、区で2名の新聞部員が選出され、この新聞部員は分館の公民館役員ではないという位置づけになっているのである。

この本館と分館との関係は、〈図表 41〉のように示すことができる。

〈図表 41〉 龍江地区 本館と分館の関係



〈図表 41〉の第1～第4分館における右端の点線で示した四角は、分館の組織体制レベルにおいて、新聞部が組織化されていないことを表している。

〈図表 40〉における本館の役員構成や、〈図表 41〉における役員選出の流れを見ればわかるように、本館の組織体制は、各区代表などによって組織・構成されている。このように、本館と分館は相互補完的に機能し、両者は極めて関係が深いものであると言える。

ここで注目すべきは、〈図表 40〉の、本館組織の新聞部における「館長推薦 (4)」という項目である。これは、後述するように、龍江公民館では本館事業として、新聞部が公民

館報「龍江新聞」を毎月作成・発行しており、2012(平成24)年3月現在で第748号を数え、「龍江新聞」は約60年の歴史を有していることと関係している。それゆえに、新聞部の専門性の担保や事業の継続性の点から、本館の新聞部に「館長推薦 (4)」という項目が存在していることは、龍江地区の公民館組織の大きな特徴であると言える。

〈図表 42〉 龍江地区分館の組織体制



分館の組織体制は、〈図表 42〉のようにイメージ図として示すことができる。

はじめに指摘すべきことは、龍江地区においては、〈図表 42〉を見ればわかるように、前記の上郷地域や鼎地区とは異なり、公民館の「役」として副分館長を設置していないことである。それゆえ、分館長はもちろんのこと、分館主事の存在が、他の副館長職を設置している地域や地区よりも相対的に大きな位置を占めることになる。よって、龍江地区における分館長と分館主事の役割は、公民館活動にとってより重要な意味を持つことになる。

この分館長と分館主事は、互いに協力し、分館における公民館活動全体や各専門部の活動を俯瞰しつつ、住民の相談相手、住民の学習課題や生活課題の明確化、各関係機関・団体の相互連絡調整、一住民として協同すること、などの多様な役割<sup>75</sup>を担うことが求められていると言える。

各部については、組織化がなされていない新聞部を除く、文化部、体育部、青少年健全育成部の各専門部は、部長や副部長を中心と

<sup>75</sup> 大橋謙策「公民館職員の原点を問う」『月刊社会教育』第28巻第6号, 1984, pp.12-20.

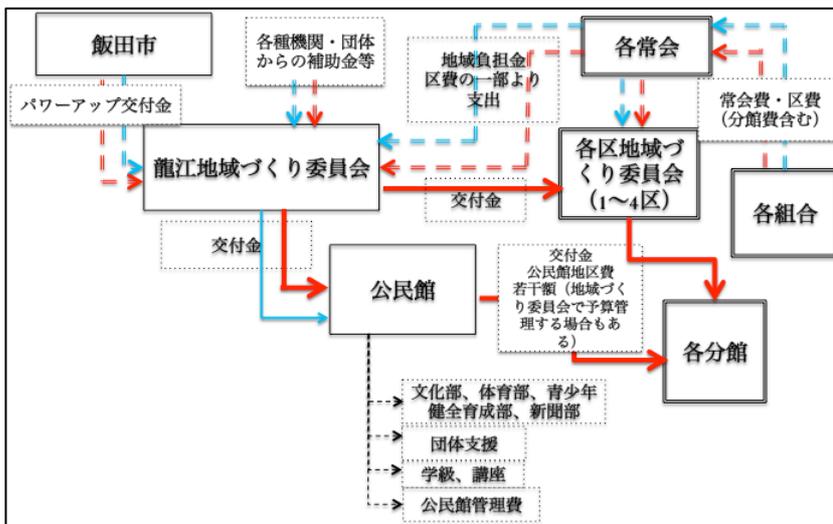
して、各公民館事業の企画・運営を行うこととなっている。

龍江地区では、本館事業として公民館報「龍江新聞」(2012年3月現在、第748号)を毎月作成・発行しており、その役割を本館の新聞部が担っている。そのため、組織化がなされていない区選出の新聞部員に関しては、「龍江新聞」で各分館の事業を取り上げる際の取材などに対応するといった役割を担っている。

## 2 分館の財政

龍江地区の分館の財政については、〈図表43〉のように示すことができる。

〈図表43〉 分館の財政



出典：龍江公民館提供「龍江地域づくり委員会総会資料」を基に作成。

点線が分館財政における主な収入を、細い実線が龍江公民館(本館)への分配・支出を、太い実線が分館への分配・支出を表している。まず、収入の流れであるが、龍江地区における主な収入源は、①「パワーアップ交付金」(本館・分館費を含む)、②「各種機関・団体からの補助金」(本館・分館費を含む)、③各組合から徴収した「常会費・区費」(分館費を含む)、である。この①～③が「龍江地域づくり委員会」に一旦集められ、それが本館・分館へと分配・支出される仕組みとなっている。

次に分配・支出の流れであるが、龍江地区

では、「龍江地域づくり委員会」から、龍江公民館(本館)への公民館分の「(パワーアップ)交付金」と、地区各戸から徴収されたいわゆる「公民館地区費」の2つが交付される。その中から、本館から分館への若干額の助成がなされ、その扱いは分館ごとに分館独自の通帳管理の場合と、当該区の地域づくり委員会の通帳へ入れる場合とがある。

なお、分館の主な運営費は、各区の地域づくり委員会で集合徴収して分配される「常会費・区費」に含まれる「分館費」であり、本館や「龍江地域づくり委員会」から分館を直接の交付対象とするものはほとんどない。

## 第3節 役員選出の方法

分館役員の選出方法は、〈図表44〉の通りである。

分館役員の選出方法であるが、まず、〈分館長〉の選出方法は、いずれの分館も「選考委員会による選出」である。「選考委員会」とは、各常会長と現役員から構成され、役員選出の際に組織されるものである。

〈主事〉については、第2と第3分館が

「分館長が独自に指名」する方法を採っている。第1分館は、「区の役員会にて選出」となっているが、実質的には、分館長が事前に主事候補を選出し、区の役員会において信任するという形になっている。第4分館は、各常会から上がってきた18名の部員の中から、分館長が選出をするという形を採っている。その際、欠員が出た専門部においては、新たに部員を補充することはせずに、他の部員が兼務することになっている。

〈各部長(正副)〉の選出方法については、第2～第4分館は、「分館長と分館主事による相談」によって決定している。第1分館につ

いては、「区の役員会にて選出」となっているが、実質的には、事前に分館長と分館主事候補が相談し、各部長（正副）候補案を作成した後、その案を区の役員会にて信任してもらうという形になっている。

〈図表 44〉分館役員の選出方法一覧

	第1分館	第2分館	第3分館	第4分館
分館長	選考委員会（各常会長＋現役員）による選出	選考委員会（各常会長＋現役員）による選出	選考委員会（各常会長＋現役員）による選出	選考委員会（各常会長＋現役員）による選出
主事	区の役員会にて選出	分館長が独自に指名	分館長が独自に指名	分館長が部員の中から選出
各部長（正副）	区の役員会にて選出	分館長と分館主事による相談	分館長と分館主事による相談	分館長と分館主事による相談
部員	各常会（9）から男女2名（18）	各常会（8）から男女2名（16）	各常会（8）から男女2名（16）	各常会（9）から男女2名（18）

出典：龍江公民館提供資料「龍江地域づくり委員会総会資料」や聞き取り調査より作成。

〈部員〉については、いずれの分館においても「各常会から男女2名」が選出される。その際、分館の組織体制レベルにおいて組織化がなされていない新聞部員も、区で2名の部員が選出される。この新聞部員は、分館の公民館役員ではないという位置づけとなっている。

さて、龍江公民館提供の資料や聞き取り調査の結果<sup>76</sup>から、龍江地区の分館役員の特徴として、次の三点が指摘できる。

それは第一に、分館長は男性であり、副分館長という役職については設置をしていないこと。特に、既述のように副分館長を設置し

<sup>76</sup> 龍江地区に関しては、三度にわたって聞き取り調査が行われた。具体的には以下の通りである。一度目：木下俊亮氏（飯田市龍江公民館長）、鈴木公平氏（第2分館長）、林庄吉氏（第4分館長）：2011年6月23日（木）16:00～18:00、於：龍江地区第2分館（今田人形の館）。二度目：木下俊亮氏（飯田市龍江公民館長）、北原研二氏（新聞部長）、松下芳彦氏（文化部長）：2011年10月26日（水）19:00～20:30、於：飯田市龍江公民館。三度目：木下俊亮氏（飯田市龍江公民館長）、清水清氏（第1分館長）、窪田進氏（第3分館長）：2011年10月28日（金）10:00～11:30、於：飯田市龍江公民館。

ていないことは、龍江地区の特徴である。第二に、専門委員の副部長はたいていの場合男性であるが、女性が担う場合もあること。第三に、地域の職場と公民館とのつながりが存在することである。特に、この第三の特徴は注目すべきものである。現在もなお約20年間に渡って公民館活動に携わっているAさんのお話によれば、公民館活動への参加のきっかけは、職場の先輩から分館活動への参加を促されたことであったという<sup>77</sup>。

なぜ公民館というものに関わったのかと言うと、やっぱり郵便局というのは、地域とのつながりがあっての仕事になるので、正直、郵便局の先輩方に龍江公民館、龍江新聞を作ってきた先輩方がたくさんいまして、おまえも郵便局に入ったのであれば公民館というものに関わっていかないとだめだ、というようなことを言われて、公民館にまず足を一歩踏み入れたわけです。

こうした職場と公民館との目に見えない自然なつながりが点在していることが龍江地区の特徴であると言えるだろう。

さて、さらに、分館役員のなかでも、分館活動の舵取りの役割を担う〈分館長〉に焦点を絞ると、次のような特徴が指摘できる<sup>78</sup>。

それは第一に、分館長の年齢は50～70代と幅広く、当該地域の事情に明るい人物が選出されていること。具体的には、学校関係者や地域の地縁あるいは自治組織のリーダーである、あるいは過去にそうであった人などが多いことである。第二に、公民館役員を長期間担った経験のある分館長が多いこと。例えば、ある分館長さんは、B部の部員を16年務め、その後B部副部長を2年務めるなど、合計で20数年分館の役員を務めた経歴を持っている。

#### 第4節 分館の活動

##### 1 分館事業

龍江地区の分館事業の内容は、〈図表 45〉

<sup>77</sup> 同上。

<sup>78</sup> 同上。

の通りである。ここでの「本館」とは、本館事業への参加を意味している。〈図表 45〉から明らかのように、龍江地区の分館事業は、本館事業への参加を主としていることがわかる。分館単位で行う独自の事業としては、例えば、親子ふれあい講座、納涼祭、スポーツ大会、正月飾り講座などが挙げられる。

〈図表 45〉分館事業一覧

月	本館事業	第1分館	第2分館	第3分館	第4分館
4	総会、天龍峡マラソン、さくら祭り、ペタンク大会	本館	本館	本館	本館
5	分館対抗スポーツ大会	親子ふれあい講座、本館	親子の集い、本館	家族と子どもの集い、本館	親子ふれあいの日、本館
6	分館スポーツ月間	マレット大会	スポーツ交流	ペタンク大会	スポーツ交流
7	ふるさと探検	納涼祭、本館	本館	本館	本館
8	人形劇フェスタ	本館	本館	本館	本館
9	水辺の楽校魚釣り大会	本館	本館	球技大会、本館	本館
10	地区市民運動会	本館	本館	本館	本館
11	文化・芸能祭	本館	本館	本館	本館
12	龍江一周駅伝	正月飾り講習、本館	本館	本館	本館
1	成人式、冬季教養講座	本館	本館	本館	本館
2	市民館大会、百人一首、龍江カルタ大会、冬季教養講座	本館	本館	本館	本館
3	クラブ合同納め会	本館	本館	本館	本館

出典：龍江公民館提供資料「龍江地域づくり委員会総会資料」より作成。

本館との合同事業について、各専門部との関係性を詳細に見ていくと、次のようになる。

文化部については、ふるさと探検、人形劇フェスタ（地区公演）、ふるさと探訪、文化祭・芸能祭、分館冬期教養講座など。

体育部については、天龍峡マラソン、天龍峡街道さくら祭り、ペタンク大会、分館対抗スポーツ大会、地区市民運動会、ニュースポーツフェスティバル、龍江一周駅伝の集い、健康教室など。

青少年健全育成部については、竜東中学校地区交流スポーツ大会、ふるさと探検、水辺の楽校魚釣り大会、百人一首、龍江カルタ大会など。

新聞部については、前記のように、龍江地区では、本館事業として公民館報「龍江新聞」の作成・発行が毎月行われているが、分館事業として独自の事業は存在していない。

## 2 分館と地域団体との関係

龍江地区における分館と地域団体との関係は、龍江公民館提供の資料や聞き取り調査の結果<sup>79</sup>から、次のことが指摘できる。

第一に、第1～4のいずれの分館においても、壮年の会、PTA、高齢者クラブが存在していること。第二に、第1～4のいずれの分館においても、少子高齢化に伴って、現在は青年団、婦人会といった地縁的な自治組織が消滅してしまったこと。第三に、龍江地区に現存する壮年の会、PTA、高齢者クラブは、分館活動に果たす役割の度合いが低いこと、が指摘できる。

以上から、龍江地区においては、分館と地域団体との関係は希薄であること、さらに、PTA 以外に、女性がまとまる機会がほとんど存在しないこと、が指摘できる。ただし、聞き取り調査では、確かに分館と地域団体との関係は希薄で

であると目に映るかもしれないが、住民個人のレベルで見ると、住民たちは「常会」や「隣組」といった単位をより身近に感じ、「常会」や「隣組」というより小さな単位では住民同士の信頼関係が十分に構築されており、この「常会」「隣組」単位を通して分館を意識することも多々ある、という話が出たことにも留意する必要がある。

## 第5節 考察

最後に、龍江地区の分館の特徴と課題について論じる。まず、龍江地区の分館活動の特徴については、次の五点に集約できる。

第一に、「結」の絆（ご近所の底力、地域力）の存在である。龍江地区には、「結」の絆

<sup>79</sup> 同上。

という、隣近所同士の助け合う精神が存在し、地域の分館活動や役員選出などの際に効果を発揮し、公民館活動に携わる際には、特にその絆が実感できるという。例えば、次のような話を伺った<sup>80</sup>。

この地区は昔から「結」という言葉がありました。例えば、農作業でも田植でも、昔はトラクターみたいなものはないですから。仮にあったとしても、こういう中山間地ですから、棚田みたいところで機械が入りませんからね。すべて手作業でやらざるを得なかった。ということで、親戚、あるいは隣近所で助け合って、田植とか農作業をやっていたわけですね。そういうことで、「結」、お互いの絆の強い部分があるもんですから、そういう伝統的なものが、DNA がそれぞれに入り込んでいるということはあります。地域力、ご近所の底力みたいな部分があるんじゃないかな、とは思っています。（下線部引用者）

第二に、特別養護老人ホーム「ゆいの里」の存在。龍江地区では、地元の有志で特別養護老人ホーム「ゆいの里」を設立したという経緯がある。この「ゆいの里」の設立も、「結」の絆がおそらく関係しているだろうということであった<sup>81</sup>。

第三に、区（第1～第4）ごとのまとまりが強いことである。龍江地区では、地域行事や運動会においては各区が互いに良きライバルとして認め合っているという。この互いを良きライバルとして認め合うことが、各区内のまとまりにつながっており、本館が各分館（区）間の連絡調整の役割を果たすことによって、地域全体の団結力の高まりに寄与している。しかし、区ごとのまとまりが強いがゆえに、日常的な分館活動においては、各分館の横の連携はあまりないという現実がある。

第四に、伝統芸能・文化活動が盛んであること。龍江地区は、伝統や歴史が根付いてい

る土地であり、こうした地域の伝統や歴史を活かした活動が盛んに行われている。例えば、人形劇フェスタ地区公演や地元の奉納祭においての「今田人形」の上演や、龍江地区の自然や特色ある歴史、旧所名跡、産業の古今などを記した「龍江かるた」（100枚ずつの読み札と取り札のセット）<sup>82</sup>をふるさと再発見講座で使用したり、それを地域の人々や新入学児童に無料配布していること。さらには、60年余りの歴史を有する「龍江新聞」の存在などを挙げるができる。特に、「新聞部員のたゆまぬ努力と、龍江地区民の理解と協力の結晶と云うべき龍江新聞は龍江公民館と云うより、飯田市龍江の誇りであると云っても過言ではない」<sup>83</sup>との記述からもわかるとおり、「龍江新聞」の存在は、龍江地区における活発な公民館活動を象徴していると言えるだろう<sup>84</sup>。

第五に、スポーツ活動が盛んであること。例えば、分館対抗スポーツ大会、地区市民運動会、龍江一周駅伝、女子ソフトボール、女子バレー、夜間ソフト、早起き野球など、が挙げられる。こうしたスポーツ活動を通して、

<sup>82</sup> 「龍江かるた」は、1994・95（平成6・7）年度の2年間に渡って、龍江公民館文化委員会の事業として作成されたものである。2009（平成21）年度には、「地域発元気づくり支援金」を活用し、内容の見直しなどを行い再版されている。なお、初版の歌は、龍江村誌編纂委員会編『龍江村誌』龍江村誌刊行委員会、1997、pp.640-641.に記載されている。

<sup>83</sup> 龍江公民館提供資料「毎月発行・500号の龍江新聞」p.283.

<sup>84</sup> 次の記述が象徴的である。「昭和24年度部制組織は6部で、新聞部の他に総務部、図書部、産業部、芸能部、社会部で、総予算は52,000円、そのうち30,000円は新聞部であった」。「（龍江地区では『龍江新聞』を一引用者注）『館報』とは呼ばず飽くまで『新聞』と呼び続けて来ている。それは（『龍江新聞』の創刊以前に、青年団OBといった有志によって発刊されていた新聞である—引用者注）『村の声』時代から培われた地区民の自分たちの新聞だという親近感を持っていてくれるようで、『龍江新聞』の廃刊問題や購読料（合併以後）値上げ問題等が起きた時、地区の人達は丸となって新聞続刊を守りぬいてくれた。」（同上、p.284.）

<sup>80</sup> 同上。

<sup>81</sup> 同上。

上記で指摘した区ごとのまとまりが、より強固なものとなっていくのであろう。

以上を踏まえ、龍江地区の分館の特徴を一言で表せば、龍江地区における分館活動は、地域住民に対して、伝統芸能・文化活動やスポーツ活動（公民館事業）を通して、地域住民同士のつながりや、地域そのものを意識する契機を提供している、と言えるだろう。

こうした龍江地区における分館活動を象徴する話として、以下に特に印象に残ったお二人のお話を載せておきたい<sup>85</sup>。

子どもが小学校を卒業して、PTAの役も終わってやれやれと思っていましたら、PTAの先輩から公民館文化部をやってもらおうから頼むと言われたんです。どうしたことだと聞きましたら、小学校のPTA会長をやった人が文化部の副をやって、部長をやる、そういう流れで、きているんだと。そういうことを聞きまして驚いたし困ってしまいました。(中略) 本当はとても僕にはできないから丁重にお断りしようかとも思いましたが、これから龍江にずっと住み続けるわけだし、地域の役だし、こういう役もやらしてもらってもいいかなあと、そんなような気持ちが固まってきましたから、お受けしたわけであります。(中略) 今までやらせていただいて、感じたことは、知らなかったことを知ることができたというのは当然ですが、一番は人間関係の広がりだと思います。役を受けていなかったら、地区内にいても知らないまま一生を終えてしまったと思いますが、こういうことは本当に大きいと思いました。それから公民館というのは、地区運動会にしても、文化祭、芸能祭、成人式も担当しますが、いろんな事業がありまして、地域に元気を与える源になっていると、そんなふうに思います。(下線部引用者)

今こういう新聞づくり、新聞部長という立場になって、(中略) なぜ今こんなことができるのかなあと考えると、過去の青年塾を経験し

た頃に、ある公民館主事さんから言われた一言ってというのが今でも頭に残っているんです。(中略) その公民館主事に、今若いときにいろんな人に会ったり、いろんな仕事をして勉強をして、将来は地区に帰って地区を引っ張る人間になれよ、って言われたのがその頃、20歳頃ですね。その言葉があるからこそ、(中略) それが一番心に残っているんです。(下線部引用者)

「役」をやることによつての「人間関係の広がり」、公民館は「地域に元気を与える源になっている」、公民館主事に「将来は地区に帰って地区を引っ張る人間になれよ」と言われたこと。これらの言葉は、公民館(分館)が、ごく自然に、当たり前のように、龍江地区に住む人々の暮らしの一部として存在しているということ、さらには、龍江地区における公民館(分館)活動の豊饒さや多様性を物語っていると言えるだろう。

最後に、以上を踏まえて龍江地区の分館活動についての課題を述べる。

近年、産業構造の変化や就労形態の変容、少子高齢化などによって、若い世代が地域行事や地域の「役」といった公民館活動に関与することがますます難しくなっている。このような事態は龍江地区も例外ではない。それゆえ、以上の事態に対応し、公民館活動をより十全なものにしていくためには、次の三点の課題を考える必要がある。

それは、第一に、農業を基盤とした龍江地区における公民館活動の意義や役割をどのように考えるのかという課題。第二に、分館と地域団体(地縁・ボランティアなものを含めた)との横の連携をいかに図るのかという課題。第三に、女性と公民館との関係をいかに結び付けていくかという課題、である。

こうした課題は、若い世代や女性といった公民館の周縁に位置する人々に対して、公民館は自身の魅力をどのように表現し、周縁に位置する人々の公民館活動への参加動機や意欲をいかにして調達・獲得すべきかという問題として捉えられ、さらには、公民館活動を媒介としながら、どのような地域の担い手を

<sup>85</sup> 聞き取り調査による。

いかなるプロセスを経て育成するのかという問題と密接に関わっている。

公民館の周縁に位置する人々は、どのようなまなざしで公民館を見ているのであろうか。周縁から公民館を見、常に自身の公民館活動を自省的に展開していくことは決して容易なことではないが、今後決して避けては通ることのできない問題であることには違いないであろう。

(古壕典洋)

## 第2部 分館以外の地域活動

### 第5章 上久堅地区における地域づくり：長谷部三弘氏の活動から

上久堅地区は、飯田市の中心市街地から、12kmほど離れた、伊那谷南部の東側斜面にある高地で、平坦な地が少なく、谷間に集落が点在している中山間地域である。1964（昭和39）年に、龍江村、千代村とともに、飯田市に編入合併されている。

人口は、地区全体で1,491人、世帯数は523である（2012年1月末現在）<sup>86</sup>。人口の減少や、高齢化の進展という意味では、飯田市の中山間地区に共通の特徴を有する。一方で、1989（平成元）年3月に「上久堅地域づくり策定委員会」が「鎮守の杜構想・十三（とさ）の郷づくり」を策定するなど、住民自治への高い意識が見られる。

本章では、『上久堅住民自治のあゆみ』をまとめるなど、同地区の地域づくりに大きなリーダーシップを発揮してきた、長谷部三弘への聞き取りをもとに、上久堅地区の地域づくりについて考察を行う。長谷部氏への聞き取りは、2011（平成23）年10月26日（水）14時～16時半に、上久堅公民館にて実施した。

〈図表46〉上久堅地区の人口動態

	人口	世帯数	高齢化率
1960	3,222	689	9.0%
1965	2,854	649	
1970	2,619	618	14.6%
1975	2,575	613	
1980	2,493	605	18.4%
1985	2,394	604	21.8%
1990	2,245	593	26.0%
1995	2,078	568	30.4%
2000	1,850	551	35.2%
2005	1,666	522	37.5%

出典：各年度の国勢調査より筆者作成。

<sup>86</sup> 「飯田市の世帯数と人口」  
<http://www.city.iida.lg.jp/iidaspher/www/info/detail.jsp?id=3124>（2012年3月2日確認）

### 第1節 長谷部氏の経歴

長谷部氏は、1932（昭和7）年生まれで、高校卒業後、上久堅村役場に就職し、1955（昭和30）年から、1966（昭和41）年まで上久堅村（合併後は上久堅地区）の公民館主事を務めた。

社会教育課社会教育主事の時代には、飯田市民セミナーに取り組んでいる。市民セミナーは、1972（昭和47）年に当選した松澤太郎市長のもと、公民館に対して大幅な補正予算がつけられたことを契機に、1972（昭和47）年に実現したものである。市民セミナーは、従来の講座と区別され、その狙いは、①市民の権利意識の醸成：「自分たちの地域は自分たちの手で」まちづくりのためのセミナー、②市民の自発的発想を活かしたまちづくり、③地域の課題を積極的に学習し、住民1人ひとりが飯田を考えることであるとされる<sup>87</sup>。

長谷部氏はその後、飯田市役所税務課係長を挟んで、1982（昭和57）年から翌年にかけては、飯田市企画広報室で「飯田市10万人都市構想」の策定に中心的に携わっている。飯田市が理想とする都市像の実現に向けて行動理念として掲げられた「ムトス飯田」<sup>88</sup>の名付け親になったのも長谷部氏であると言われている。

1984（昭和59）年から1990（平成2）年には、飯田市公民館の副館長を務めている。この間には、「ふるさと再発見：身近にある素材を活かせ」という3年間の主事会プロジェクトとして、国鉄飯田線を利用した移動教室や、風越山の魅力の再発見、動物園の見直しなどのプロジェクトを行っている<sup>89</sup>。また、劇人、市民、行政の三位一体の取り組みとして全国

<sup>87</sup> 飯田市公民館編『飯田市公民館活動史』南信州新聞社出版局、1994、p.156。

<sup>88</sup> ムトス飯田は、1985（昭和60）年から表彰事業、1991（平成3）年から助成事業を行っており、地域活動の活性化に大きな役割を果たしている。「ムトス飯田の概要について」

[http://www.city.iida.lg.jp/iidaspher/open\\_imgs/info/000000023\\_0000009142.pdf](http://www.city.iida.lg.jp/iidaspher/open_imgs/info/000000023_0000009142.pdf)（2012年3月2日確認）

<sup>89</sup> 長谷部三弘『『地区セミナー』で育った力がいまムラおこしにとりくむ』『月刊社会教育』35(4)、1991、pp.27-32。

的にも注目を集めた「人形劇カーニバル」の実施にも深く携わっていた<sup>90</sup>。

上久堅地区の地域づくりの基盤となった「鎮守の杜構想・十三（とさ）の郷づくり」の策定にも、長谷部氏は深く携わっている。当時の上久堅地区は合併から26年が経ち「当事者能力」を失っていたとされる<sup>91</sup>。このような状況のもと、13の集落が自立した活動ができることを目的にして構想が策定された。

構想の実現のために3つの決まり事が作られた。1つは、各集落でシンボルとなる花木を選定し、植樹することである。宝くじ協会からの100万円の補助金を受けて、農村公園に13集落のシンボルとなる花木が植樹された。2つ目は、自主的実践グループの立ち上げである。〈図表47〉に示すように、各集落に実践グループが作られた。3つ目は、各集落が行動計画を立て、具体的に実践するということであり、下水道の敷設や、公園の整備、農産物を加工した特産品の生産などが行われた<sup>92</sup>。

市役所退職後は、飯田市公民館運営審議会委員長や、上久堅自治協議会会長（1996～99

年）、飯田市社会教育委員、長野県地域づくりネットワーク協議会会長など、現在まで社会教育や地域づくりに深く携わっている。

飯田市の公民館主事はその異動の仕方から、(a) 経験蓄積型、つまり1つの地区で4年以上主事を務め、その後異動した地区でその経験を活かして職務を遂行するタイプ（もしくはその逆の異動パターン）、(b) 地域定着型、つまり1つの地区に5年以上いて、地域に密着した活動を展開するタイプ、(c) 複数経験型、つまり短いサイクルで異動を繰り返すタイプ、(d) 早期異動型、主事として3年以内のうちに（公民館内の異動も経ず）他部署に異動するタイプの4種類に分けることができるが<sup>93</sup>、長谷部氏は、「地域定着型」を代表する主事であり、その経験が、公民館や社会教育の現場だけでなく、退職後の地域活動に活かされている点が注目に値する。

## 第2節 長谷部氏の地域での活動

退職後の長谷部氏は、それまで行政職員として推進してきた地域づくりの活動に、自ら取り組み始めた。当初は、これまで行政の職

〈図表47〉上久堅地区の実践グループ

集落名	グループ名	活動の概要
原 平	相原農業を考える会	「まち」と「むら」の交流。野菜の産地直送事業(5月～10月)。
中 宮	中宮を考える会	区内マップ作りから始め、活性化に取り組む。
下 平	ジタジタ会	神の峰城址公園整備と有効活用。
	綾姫の会	郷土料理研究会「秋葉御膳」弁当など。
大 鹿	鹿の会	めだかの分校(池)の設置と増殖事業。ホタルの養殖(玉川など)事業、ホタルまつり。
上 平	のらくろ会	露天商の許可を得て、各種イベントへ出店。名物「お焼き」など。
風 張	アジサイの会	細田川を守る活動。アマゴの放流と保護活動の推進。
堂 平	でごいち会	りんごの木のオーナー制と交流活動。
越久保	こいくぼ農工舎	農産物品の加工と販売。梅肉エキス、キャラふき、五色餅など。
森	どうする会	減反水田活用、タニシの養殖事業。
小野子	たまげた会	手づくりの溜まり場(ログハウス)建設事業。太鼓グループの結成(九頭竜太鼓)。
落 倉	南天の会	森林資源の活用、松だけ山の環境整備事業。
平 栗	ひらぐり会	平栗峠の整備事業、植栽、除伐など。各種イベントに出店参加。
蛇 沼	ハの会	ログハウス建設、休耕田の活用事業。内外のグループとの交流。

出典：「十三の郷実践グループ」<http://www.kamihisakata.sakura.ne.jp/fudosya/13/list.html>

<sup>90</sup> 長谷部三弘「国際交流の花ひらく人形のまち飯田」『月刊社会教育』33(1), 1989, pp.15-21.

<sup>91</sup> 長谷部氏へのインタビューによる。

<sup>92</sup> 上久堅住民自治のあゆみ編集委員会編『上久堅住民自治のあゆみ』上久堅公民館, 2010, p.55.

<sup>93</sup> 詳しくは、荻野亮吾「公民館主事の「専門性」と地域住民との関わり」東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室 飯田市社会教育調査チーム『開かれた自立性の構築と公民館の役割：飯田市を事例として』(学習基盤社会研究・調査モノグラフ2) 2011, pp.29-38.

員として務めて来た恩返しを意図した「俸禄の会」の結成に向けて動いていたが、事情があつて頓挫したという。その後、住民自治の能力を高めるために、「鎮守の杜構想」に携わった住民に呼びかけて、1991（平成3）年に「風土舎」を設立した。

「風土舎」という名前は、信州大学の玉井袈裟男教授の理念に基づくとされる。具体的には、「風」とは、「他所者のことで行政、大学、研究者など諸々の機関・機能のこと」を、「土」とは、「そこに住む人、ある物、風習・風俗のこと」を、「舎」とは「活動する場所や建物のこと」を指すという。長谷部氏は、この考え方を受けて、①地域づくりは、「土」が「風」の力を生かして実践すること、②活動の場所は固定した建物や場所でもなくとも良いこと、③何時でも、何処でも活動のある処に「舎」ができることを指摘している<sup>94</sup>。

長谷部氏の呼びかけに応じて、農業、商業、自営業、会社員、芸術家、市会議員など異業種の25人が集まった（現在のメンバーは15人）。かつて分館長や分館主事、青年団で活躍していた住民であるという。「メンバーはいわば公民館で育てられたっていうか、公民館の経験、体験の中で、外と触れ合ってきて、何かを話し合っていて説明していくって言う、そういう経験を持った人たち」であるとされる<sup>95</sup>。

これらのメンバーは、「オール上久堅」と称される。上久堅には、「柏原農業を考える会」「のらくろの会」など（図表47）に示したような実践グループが存在する。風土舎で、それぞれのグループのメンバーが活動し、そこで話し合ったことを、各グループに持ち帰るという関係が成り立っている。

風土舎の主な活動は、3つである。1つ目は特産品づくりで、これまで雑穀の栽培や、ワイン・精油の企画、カウチン工場の開設を行って来た。2つ目は学習文化活動であり、①鎮守の杜寺子屋の開設（1991年～）、②風土舎通信の発行（月1回、500部発行）、③自

給自足学習会を行って来た。①については、20年以上にわたる活動が評価され、住友生命「未来を築く子育てプロジェクト」の「子育て支援活動」の表彰を2011（平成23）年に受けている。

3つ目は、各地区との交流活動である。これまで日本福祉大学（1993年～）、京都大学農学部学生自治会（1995年～）、法政大学人間環境学部（2001年～）、JICA（1998年～）など、他の地域のまち・むらづくりグループとの交流を行ってきた<sup>96</sup>。

これらの活動が認められ、風土舎は、2002（平成14）年度に、前述の「ムトス飯田」の表彰を受けている。

### 第3節 長谷部氏の持つ地域づくりの理念

ここで、行政職員の時代から、一貫して地域づくりに関わって来た長谷部氏の地域づくりの捉え方の特徴を3点に分けて見ることにしたい。

第1に、「地域」の捉え方である。長谷部氏は、集落ないし町内会の単位を地域と捉えている。もう少し具体的には、「高齢者と子供や幼児が歩いていける」範囲、ないし「お寺の鐘の聞こえる範囲」を指す<sup>97</sup>。そして上久堅地区の特徴として、①分家・本家という血縁関係が非常に濃いこと、②近隣は親しい関係であるが、利害・損失が直結していること、③隣近所の監視が非常に強いこと、④新しい住民が少ないこと、⑤個人の主張をしにくいこと、⑥社会的地位や名声が通用しないこと、⑦建前論が通用しないこと、の7点を挙げている<sup>98</sup>。このような地区では、長谷部氏のように、公民館や社会教育に行政職員として携わり、大きな実績をあげてきただけでは十分でなく、地域で実践的な活動を行うことで、初めて認められることになる。

<sup>96</sup> 活動内容の詳細については、長谷部三弘「上久堅の自治：都市と農村との交流（オープンカレッジ「人にやる気・村に活気・地域づくりの学習会」Part6、第3部講演録）」『地域総合研究』10, 2009, pp.235-250.

<sup>97</sup> 同上, p.236.

<sup>98</sup> 同上, pp.236-237.

<sup>94</sup> 長谷部三弘「自治のムラづくりと学び」『月刊社会教育』53(4), 2009, pp.29-30.

<sup>95</sup> 長谷部氏へのインタビューによる。

なお、上久堅地区では、飯田市の鼎地区や上郷地域のように、分館が集落の単位と一致する地区と異なり、13の集落と、6つの分館の単位は一致していない。分館単位で行うのは運動会や市民セミナー、人形劇フェスタの開催など一部の活動に限られており、日常的な活動は集落単位の活動を基盤にしている。もともと、日常の生活単位での活動が、積み重なって、地区全体の活動を形成しているという点では、上久堅も他の地区と大きな差はない。

注目すべき点があるとすれば、長谷部氏自身が長野県地域づくりネットワーク協議会の会長を務めるなど、実践的グループのネットワーク化が図られている点である。上記のように風土舎は、上久堅内の実践グループの交流の拠点としての機能を果たしてきたのであるが、風土舎もまた長野県地域づくりネットワーク協議会のメンバーとなり、他の地区のグループと交流することを試みている。日常の集落単位での活動を基盤としながらも、他のグループとの情報の共有と交流を通じて、1つの集落がより大きな地区へ、そして地区が市や県へとつながっていくことで、地域の閉鎖性を薄めることができているのではないだろうか。

第2に、「自治」についての考え方が挙げられる。長谷部氏は、行政に依存した地域を批判する一方で、行政をいかに使いこなすかという視点も持ち合わせている<sup>99</sup>。

行政は縦糸だと思う。地域は横糸だ。その縦糸をどう地域が上手に使えるか、横糸をどうつむげるかっていうのは地域の課題、力だと思う。……柔軟な縦糸にカラフルな横糸。横糸をつむぐ力をつけるのが公民館。だからこれはボトムアップ。地域はボトムアップ、行政はトップダウン。でそのメッシュ、そうなったときにそのメッシュが出来て、上久堅では13通りのメッシュができる。飯田では20通りのメッシュができる。これが、私が言う地域づくりだ。

このように、行政を使いこなした実際の例として、戸別所得補償制度を利用した取り組みが挙げられる。農家1戸単位への補償額は限られており、各戸で別々に補償金を用いたのでは地域づくりにつながらないところを、補償金を共同で積み立てることによって、3年間で総額は2,500万円となり、その積立金を利用して鳥獣有害対策や農協での配食に取り組んだという。

近年では、行政から自律した地域づくりのあり方に注目が集まり<sup>100</sup>、地域での財源の確保が重要な焦点となっている。長谷部氏のスタンスは、地域住民が力を持つことによって、行政の施策を有効に活用することができるようになるというものであり、地域の独自性は、行政の施策を有効に活用できる住民の力量にかかっているというものである。この住民の力量を育む基礎になるのが、公民館活動であるというのが長谷部氏の見方である。

第3に、地域活動の「継続性」についての考え方がある。地域活動においてしばしば指摘される問題は、強力なリーダーシップを持ったリーダーの後を継げる、次の世代のリーダーを育成することである。この次世代のリーダーの育成を上手く行うことができず、多くの地域では地域活動が途切れてしまっている。

この点について、長谷部氏は異なる考え方を示している。実践的グループは「流れ星」のようなもので、高齢化やメンバーの入れ替わりがないことでグループがなくなるとしても、新しいグループが出てくれば良いと述べている。長谷部氏の指摘の通り、重要なことは、特定のグループが地域活動を担い続けることではなく、別のグループが入れ替わり立ち替わりその役割を担い続けることである。このような複数のグループが存在し続けられるかどうか、地域活動の「継続性」の試金石となる。

それぞれのグループが、目的に応じて作ら

<sup>99</sup> 以下、長谷部氏へのインタビューによる。

<sup>100</sup> 例えば、鹿児島県串良市柳谷集落の、通称「やねだん」の取り組みが挙げられる。豊重哲郎『地域再生：行政に頼らない「むら」おこし』出版企画あさんてきーな、2004。

れている以上、目的を遂げた時点で、継続の必要性は薄れる。継続を目的とすれば、グループの性質が変容したり、活動が硬直化することで、本来の性質を失い、グループが「制度化」することになる<sup>101</sup>。長谷部氏自身も、グループが長く続く秘訣は「嫌なことはやらない」ことにあると指摘している。

特定のリーダーやグループに焦点を当てるのではなく、地域の中でリーダーやグループが入れ替わりながらも、全体として活動が継続されていく、そのような視点を持つことが地域の動態を捉える上で重要になるのだろう。

(荻野亮吾)

---

<sup>101</sup> 例えば、佐藤慶幸『アソシエーションの社会学：行為論の展開』早稲田大学出版部、1982、第5章などを参照。